HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	リュドミラ・ウリツカヤの作品世界 : 描写と人物像の特徴を中心に
Author(s)	望月, 恒子
Citation	スラヴ研究, 53, 93-124
Issue Date	2006
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39257
Type	bulletin (article)
File Information	53-004.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

リュドミラ・ウリツカヤの作品世界
――描写と人物像の特徴を中心に――

望　月　恒　子

はじめに

現代ロシア文学の特徴のひとつとして、女性作家のめざましい活躍が論じられることが多い。1980年代から現在にいたる社会の激変は、さまざまなタイプの女性作家に活躍の場を与えることになった。ペレストロイカの前後から発表されはじめたタチヤーナ・トルスタヤ(1951年生まれ)の清新な作品群や、ポストモダン的芸術運動と関わりの深いワレーリヤ・ナルビコワ（1958年生まれ）の大胆で難解な作品は、それまでとは異質な女性文学の誕生を告げるものだった。彼女たちより年長の世代を見ると、長く作品発表の機会に恵まれなかったリュドミラ・ペトルシェフスカヤ（1938年生まれ）にも、60・70年代からずっと人気を保ってきたヴィクトリヤ・トーカレワ（1937年生まれ）にも、時代は同じように有利に影響して、ふたりとも旺盛な創作活動を続け、よく読まれている。また、ソ連崩壊後のロシア文学に、ごく短期間で探偵小説という大きなジャンルを確立したアレクサンドラ・マリーニナ（1957年生まれ)、その後を追うように登場して驚異的なスピードで探偵小説を生産し続けるダリヤ・ドンツォーワ（1952年生まれ）など、商業的文学における女性作家の活躍も忘れることはできない。ジャンルも作風も多彩な、多数の女性作家の活躍は、確かに現代ロシア文学の顕著な特徴となっている。

そうした中で、90年代に入ってから本格的創作活動を開始したリュドミラ・ウリツカヤ（1943年生まれ）は、2001年にスミルノフ・ブッカー賞を受賞し、2004年にはライター・オブ・ザ・イヤーに選ばれた。ブッカー賞は、制定後10年目で初めて女性が受賞したので話題になった。モスクワ国際ブックフェアーでの授賞式が恒例になっているライター・オブ・ザ・イヤーの方は、本の売り上げが重視される傾向にあり、1997年の制定以来、98年にマリーニナ、2002年と2003年には連続してドンツォーワが指名されており、ウリツカヤは女性として3人目ということになる。「非商業的文学作品が読者に記録的人気を得た」というのが、選出の理由であった。また文学新聞は2003年から、モスクワ市内の書店における年間売り上げのランキングを発表しているが、ウリツカヤは「まじめな文学」の部門で、2003年と2004年に続けて第1位になっている[(1)]。

もとより、文学賞の受賞歴や本の売り上げは、作家について知る際の指標のひとつにすぎない。それも、かなり表面的な指標だという指摘もできよう。しかし、文学賞制定や売り上げランキングの公表といった事象が、ポストソヴィエト文学のあり方に根本的に関

1　Литературная газета. 20 янв. 2004 (№ 2); 2-8 фев. 2005 (№ 4).

わっているのも事実である。セルゲイ・チュプリーニンの著した現代ロシア文学事典『新しいロシア：文学の世界』の巻末に、文学賞一覧が付されているが、そこには全ロシア規模から地方的なものまで、約 230 もの賞の名が並んでいる[(2)]。ソ連解体によって国家的な賞が消失した後、さまざまな文学グループや雑誌・新聞、新興の出版社などによって、次々に文学賞が制定された。他の賞に先駆けて 1992 年に設けられたブッカー賞は、現在もっとも権威ある文学賞である。十数年の作家歴でこの大きなタイトルを手にして、その後も大いに読まれているウリツカヤは、ある意味でポストソヴィエト時代を象徴する作家であると言えよう[(3)]。

ウリツカヤの作品の大半は、厳密な意味で現代小説ではなく、数十年前のソ連時代を舞台にしている。市井の人々の日常の暮らしが描かれ、人の一生と大きく関わる恋愛、病気、老いにまつわるできごとが、きめ細かく書きこまれている。基本的に個人の生が主題であって、国家的事件が直接的に書かれることはない。「私が書いてきたのはいわゆる《静かな文学》で、尖鋭な問題性も反体制的要素もない」と、作家自身が語っている[(4)]。しかし、犯罪小説やファンタジー小説のような非日常的な枠組みを用いずに、アパートや学校・大学、職場など、ごく日常的な空間ですごされる個人的生活が、時代性を忠実に反映して写実的に語られるとき、個人の生を取り囲み、成り立たせていた社会や国家の存在が、読者の意識の中に大きく浮かび上がってくる。従ってウリツカヤの作品は、筋書きが変化に富み言葉遣いも平易で、いわゆるページターナーでありながら、家庭、女性、民族、都市、芸術、科学などの広範なテーマについて、ソ連・ロシアの社会的・歴史的コンテクストにおいて具体的に考察する基盤を与えてくれる。特に 90 年代後半に集中的に発表された長編群は、個人・家族の歴史が国家的問題や社会現象と密接に結びついた複合的な世界を形成しており、描かれた時代について改めて考察させる。たとえば『メディアとその子供たち』では、古代からクリミア半島に住みついたギリシア人の末裔であるヒロインの一生を通じて、多民族が混住してきたクリミア半島の歴史や、第二次大戦中にスターリンによって強行された民族強制移住の問題が取り上げられている。『クコツキーの症例』では、著名な産婦人科医である主人公の経験を通して、妊娠中絶禁止の政策がもたらした悲劇的な事例や人々の苦悩を知ることができる。『ソーネチカ』と『陽気なお葬式』では美術、『メディアとその子供たち』では詩、『クコツキーの症例』ではジャズに生きる人々が描かれ、ソ連の非公式芸術のあり方について考えさせる。他にも、ソ連における宗教、科学者と国家の関係、知識人一般の社会的役割など、ウリツカヤの作品はソ連期の様々な問題を取り上げている。

ただ、ウリツカヤは小説家であり、彼女の小説にあっては現実の社会的事象は常に、小

2　*Чупринин С.И.* Новая Россия: мир литературы: Энциклопедический словарь-справочник. В 2 т. Т. 2. СПб., 2003. С. 886-921.

3　ウリツカヤは 1993 年に作品『ソーネチカ』でブッカー賞の最終候補に残ったが、受賞は果たさなかった。しかし、『ソーネチカ』は 92 年の発表後すぐにフランス語、ドイツ語、イタリア語に翻訳され、96 年にすぐれた翻訳としてフランスのメディシス賞を、98 年にイタリアのジュゼッペ・アツェルビ賞を受賞した。作品集の出版も、フランスの方が先行した。国内よりも国外で早く注目されたことも、時代と深く結びついたウリツカヤ文学の特徴のひとつである。

4　2003 年 5 月の発言。http://www.litwomen.ru/autogr23.html（以下 URL は 2006 年 4 月 28 日現在有効。）

説内の世界を成り立たせるための要素として存在している。彼女の作品を読み解いて上記のような歴史的・社会的テーマについて考えるためには、まず彼女の作品の文学的特徴を知らねばならない。本論ではデビュー以来のウリツカヤの作品を概観し、描写や人物像の共通点、特徴を探って、作家としてのウリツカヤの特色について考えてみたい。

1. 作品一覧

ウリツカヤはモスクワ大学で遺伝学を専攻し、卒業後はソ連科学アカデミーの総合遺伝学研究所に勤務していたが（1968-70）、サミズダート作品をタイプで複製した件で解雇された。カーメルヌイ・ユダヤ音楽劇場の文芸部主任の仕事（1979-82）を経て、80年代はルポルタージュ、児童劇の脚本、ラジオや人形劇のための文芸作品の脚色など色々なジャンルで、「書く」仕事に携わった。80年代の終わりに、『アガニョーク』誌や国外のロシア語新聞・雑誌『コンチネント』『ルースカヤ・ムィスリ』などに作品を発表しはじめた。1992年発表の中編小説『ソーネチカ』以降は、『ノーヴイ・ミール』誌が主な発表舞台となっている。15年ほどの間に40編以上の作品が発表された。50歳近くなってから職業的作家になったウリツカヤは、まだ創作の衰えをまったく見せていない。

これまでに発表した中編・長編小説は、以下の5作である。初出はすべて『ノーヴイ・ミール』誌であった。

『ソーネチカ Сонечка』（1992）[5]

『メディアとその子供たち Медея и ее дети』（1996）

『陽気なお葬式 Веселые похороны』（1998）

『クコツキーの症例 Казус Кукоцкого』（2000年8・9月雑誌掲載時の題名は『世界の第7方向への旅 Путешествие в седьмую сторону света』。同年、単行本発行の際に改題）

『心を込めて、あなたのシューリク Искренне Ваш Шурик』（2004）

ウリツカヤは『心を込めて、あなたのシューリク』を書き上げた後、「もう長編は書かない」と言明しているので[6]、長い作品は以上の5編にとどまる可能性もある。

短編は、1989年から2005年前半までに36編が発表された[7]。最新の2作（下のリストの6）を除く34編は、次のように5群に分類される。作品群の名前は、作家自身が短編集や連作の題として用いたものである。3の短編集「幼年時代49」は絵本のような体裁で、独立した性格を持ち、他の作品集には収録されていない。それ以外の4群は、この中の2群を組み合わせたり、中編・長編と組み合わせたりして、複数の作品集に収録されている。1994年刊行の短編集「貧乏な親戚」を皮切りに、この10年間に10冊以上の作品集がヴァ

5　次の邦訳がある。リュドミラ・ウリツカヤ著、沼野恭子訳『ソーネチカ』新潮社、2002年。本論における『ソーネチカ』の引用は、この沼野恭子訳に拠った。

6　Новые известия. 21 апр. 2004.

7　これは、本論初稿を執筆した2005年8月現在の作品数である。その後、短編集「我らが皇帝の臣民」が出版された（*Улицкая Л.* Люди нашего царя. М., 2005.）。これには、本論で(6)として分類した2編を含む37の短編と、『最後に Последнее』と題する断章が収録されている。この短編集は、本論の分析の対象には含まれていない。

グリウス社とエクスモ社から刊行され、大部分が何度も版を重ねている[8]。

1)「貧乏な親戚 Бедные родственники」(8 編)：
『幸せな人々 Счастливые』
『貧乏な親戚 Бедные родственники』
『ブローニカ Бронька』
『ゲネレ－スーモチニツァ Генеле-Сумочница』
『ブハラの娘 Дочь Бухары』
『リャーリャの家 Лялин дом』
『グーリャ Гуля』
『選ばれた民 Народ избранный』
2)「少女たち Девочки」(6 編)：
『人の手の技ならぬ贈り物 Дар нерукотворный』
『他人の子 Чужие дети』
『捨て子 Подкидыш』
『あの年の 3 月 2 日 Второго марта того же года』
『水ぼうそう Ветряная оспа』
『貧しく幸福なコルィワーノワ Бедная счастливая Колыванова』
3)「幼年時代 49 Детство сорок девять」(6 編)：
『キャベツの奇跡 Капустное чудо』
『ろう細工のアヒル Восковая уточка』
『ささやき爺さん Дед-шептун』
『釘 Гвозди』
『幸運なケース Счастливый случай』
『紙の勝利 Бумажная победа』
4)「最初の連中、最後の連中 Первые и последние」(8 編)：
『オルローヴィ－ソコローヴィ Орловы-Соколовы』
『けだもの Зверь』
『スペードの女王 Пиковая дама』
『可愛い人 Голубчик』
『ツュ－ユーリッヒ Цю-юрихь』
『ロシア人街の女たち… Женщины русских селений. . .』
『第二の人物 Второе лицо』
『真珠のスープ Перловый суп』[9]
5)「貫く線 Сквозная линия」(6 編)：
『ディアナ Диана』

8　本論末尾に、ウリツカヤの作品集のリストを付した。
9　筆者による次の試訳がある。リュドミラ・ウリツカヤ著、望月恒子訳「真珠のスープ」『現代ロシア文学作品集』北海道大学文学部西洋言語文学研究室、2005 年、84–92 頁。

『ユーロチカ兄さん Брат Юрочка』
『話はおしまい Конец сюжета』
『自然現象 Явление природы』
『幸運なケース Счастливый случай』
『生きる技 Искусство жить』

6)『ノーヴイ・ミール』2005 年 3 号に発表（2 編）
『彼らは長く生きた… Они жили долго. . . 』
『そして同じ日に死んだ И умерли в один день』

2004 年に絵本が 2 冊刊行された。
『おす猫イグナシーと、煙突掃除のフェージャと、ひとりぼっちのネズミさんの話 История про кота Игнасия, трубочиста Федю и одинокую Мышь』
『クレビャキン爺さんと、泣き虫のめす馬ミーラと、子馬ラフキンの話 История о старике Кулебякине, плаксивой кобыле Миле и жеребенке Равкине』

なお、本論末尾のウリツカヤ作品集リストに掲げたように、『100 個のボタン Сто пуговиц』という短編集が 1983 年にモスクワで発行されたことが各種資料からうかがえるが、筆者は未見である。ウリツカヤは、人形たちを主人公とする 3 分 50 秒のショートフィルム「楽しい回転木馬 No.13．100 個のボタン」（1983 年制作）のシナリオを書いているので、短編集『100 個のボタン』も児童書ではないかと推察する[10]。

本論では、「貧乏な親戚」以後の大人向けの作品を論考の対象とし、未見の「100 個のボタン」および 2 冊の絵本は、考察の範囲には含めないこととしたい。

短編『ブローニカ』が『アガニョーク』誌に発表されたのが 1989 年であり、作家自身がそれを職業作家としてのデビューとみなしている。その時点から数えてわずか 15 年ほどの間に発表された作品群を、時期によって分けるのは難しい。中・長編はすべて発表時期が明らかだが、短編については初出の雑誌と時期を確定できていないものも多いので、分類の困難さが増す。ただ、上記の分類番号で言えば、1「貧乏な親戚」と 2「少女たち」のグループは、大部分が出世作『ソーネチカ』以前に発表されており、評論でも初期の作品群として扱われることが多い。3 の「幼年時代 49」も子供を主人公とする抒情的作風に共通性があるので、本論では 1・2 と併せて論じることにする。1996-2000 年の 5 年間に集中的に発表された 3 長編『メディアとその子供たち』『陽気なお葬式』『クコツキーの症例』は、ウリツカヤの創作世界を飛躍的に拡張し、彼女の文名を確立した。短編群 4「最初の連中、最後の連中」と 5「貫く線」は、これらの長編に続く 2000 年以降の作品集に収録されている。この 2 群と 2004 年発表の長編『心を込めて、あなたのシューリク』が、比較的新しい作品群ということになろう。

10　ショートフィルム「100 個のボタン」については次を参照。http://www.animator.ru/db/index.phtml?p=show_film&fid=5676

2．初期の短編小説

この章では、初期の短編群「貧乏な親戚」「少女たち」、および小品集「幼年時代 49」について、いくつかの作品を詳しく取り上げつつ、共通する特徴を探ってみたい。

2-1．「貧乏な親戚」[11]

「貧乏な親戚」8 編は、ごくゆるやかに結びついた連作である。1 編の主人公の名が他の作品で何気なく語られるといった程度の結びつきであり、筋書きはすべて独立している。だが、ほとんどの主人公がユダヤ人で、その家庭内のできごとがテーマであること、第二次世界大戦後から 1950 年代前半のモスクワが舞台であること、そして何よりも生き生きとしたユニークな人物たちの造形によって、これらの作品はひとつの共通した世界を作り上げている。

連作の最初に置かれた『幸せな人々』は、ユダヤ人の老夫婦ベルタとマチアスの物語である。1 年中、毎週日曜に二人は路面電車に乗って長い時間をかけて、息子の墓参りに行く。ベルタが 46 歳、マチアスが 60 歳近くになって生まれた息子のヴラジーミルは、7 歳の時にボールを追って通りに走り出て、トラックに轢かれて死んだのだ。15 年前のことである。

墓地から帰った二人は食事をすませると、昼寝をする。「彼らは日曜日のいつもの夢、食後の夢を見た」という書き出しで、この上なく幸せだった 8 年間のことが語られる。体の不調に悩み、癌を疑ってそっと医師を訪れたベルタが妊娠を告げられた日から、幸福な時代は始まった。茫然としたベルタに妊娠を告げられたマチアスは、かえって驚いて彼女を見つめる。「彼はとっくに妊娠に気づいていた。彼の最初の妻は女の子を 4 人産んだのだから。だが、彼女たちの体を焼いた煙は、ポーランドの青白い野の上で、はるか昔に散り失せていた」（Бедные, 9）[12]という文で、マチアスの家族がナチスのホロコーストの犠牲になったことが示される。

息子が 5 歳になったときにマチアスは教育をはじめた。「男の子は 3 日間で、蝿みたいに互いによく似たゴツゴツした文字を覚え、もう 1 週間経つと、彼の父親が生涯右から左へ読んでいた本を読めるようになった」（Бедные, 10）。マチアスは伝統に従って、彼自身が 5 歳で父から教わったことを息子に伝える。幼いヴォーヴォチカは、ロシア語より前にヘブライ語の読み方を教わったのだ。ウリツカヤは「ユダヤ人」や「ユダヤ風」などの語を直接的には使っていないが、冒頭のユダヤ人墓地の描写、ヘブライ語の教育、ホロコーストの経験など、強烈なユダヤ的雰囲気を作品全体にみなぎらせる。その後急速に消滅し

11　作品集「リャーリャの家」(1999) では、短編『Бедная родственница』を含む連作全体の題が『Бедные родственники』となっている。短編の題は親戚の女性ひとりを指しているのに対して、連作の題は男性の複数形である。作品集「貧しい、性悪な、いとしい人々」(2002) では、短編の題も男性の複数形に変わっている。バルザックの晩年の作品『従妹ベット』『従兄ポンス』は「貧乏な親戚」（複数形）という総題（ロシア語では『Бедные родственники』と訳される）を持つ。ウリツカヤがバルザックを意識して作品の題をつけたかどうかは不明である。

12　連作「貧乏な親戚」「少女たち」中の 14 の短編と、『ソーネチカ』『陽気なお葬式』については、*Улицкая Л.* Бедные, злые, любимые. М., 2002 をテキストとする。出典は（Бедные,）と略記して、（　）内に頁数を示す。

ていったユダヤの風習や文化の記憶は、初期ウリツカヤ作品の大きな特色のひとつである[13]。

思いがけなく授かった息子をベルタは夢中で愛し、老齢で男児を得たマチアスも共に幸福にひたる。幼児の成長を見守る穏やかな暮らしが淡々とした語りで伝えられ、それぞれに辛い経験をしてきた夫婦が息子に寄せる愛は素直に読者の胸に入り込む。そしてそれが、交通事故で突然に息子を失った二人の、言葉では語られない深い悲しみへの共感を生みだす。夾雑物のない絶対的な愛と悲しみを伝える、リリシズム溢れる作品だ。

ところが、神聖な愛と悲しみの担い手である二人は、実はまったく美しくない。ウリツカヤは簡潔な表現で人物を生き生きと描き出す名手である。美しさは美しさとして、醜さは醜さとして、それを示す特徴を強調する。年取るにつれて、いっそうずんぐりしてきたマチアスと比較して、ベルタは次のように描写される―「夫と違って、彼女は年とともに何だか醜さが減ってきた。若いころ彼女の顔を台無しにしていたボソボソした大きな口ひげは、すっかり伸び切っていたが、年取った顔では前ほど目立たなくなっていた」(Бедные, 7)。身長が縮んで妻より頭半分低くなった夫と、鼻の下にひげを生やした妻の姿がまざまざと浮かんでくる。さえない外貌の人間と真に美しい愛の結びつきが、作品の印象を強めている。

欧米のフェミニズム理論に則ってロシアにおけるジェンダー、セクシュアリティの研究を進めるヘレナ・ゴスチロは、著書『魔法を解く性』で、ロシアの小説で女性の体がいかに描かれてきたかを論じている。ペレストロイカ以前には、一元的な美学イデオロギーに従って、女性の肉体的自我は一般化・無菌化され、しつけのよい閉じられた古典的身体になっていたと、ゴスチロは述べる。彼女によれば、古典的身体からの流出物として許されるのは、「絵のような悲しみの涙と、母乳」の二つの形態だけであった[14]。ウリツカヤはベルタに関して涙だけを描いているが、その描写が決して「閉じられた、しつけのよい身体」を思わせるものではないことに注意しなければならない。ベルタが妊娠を告げられる場面である。

> 「ベルタ、妊娠よ。もう何カ月にもなってるわ」
>
> ベルタはブラジャーもつけないで椅子に腰を下ろし、年取った顔に皺を寄せて泣き出した。大粒の涙が皺にそって頬をつたい、口ひげのところで速度をゆるめ、だんご鼻みたいな黒い乳首のついた大きな白い乳房に冷たくしたたり落ちた」(Бедные, 9)

この描写は、歴史的に女性に関して許容されていた身体描写から逸脱して、グロテスクな趣を帯びている。一般化・無菌化とは逆の個別化の作用が見られる。「絵のような悲しみの涙」でないことは明確だが、では何の涙なのか判然としない。喜びとも何とも名付けようのない、言語化し得ない凝縮した感情が、すでに老いた醜い女の裸の胸をしたたり落

13　レヴィ夫妻が息子の名を選ぶのに苦労する場面でも、イサク、ヤコフ、ソロモンなど典型的なユダヤの名が次々に挙げられ、ユダヤ的雰囲気を強める。

14　Helena Goscilo, *Dehexing Sex, Russian Womanhood During and After Glasnost* (Ann Arbour: The University of Michigan Press, 1996), p. 89.

ちる涙で表わされている。目立つ口ひげや、だんご鼻のような乳首といった身体上の具体性が、ウリツカヤの人物に個性を与える。

作品に心理描写はあまり多くないが、所々に散らされた心理描写を見ると、3 人称の語りは、ベルタの心理にもマチアスの心理にも同等に入り込んでいる。妊娠を知らされたマチアスの内面も（「ベルタが何も言わないことを彼は自分なりに解釈していて―話す必要なんてありはしない―、彼女自身が妊娠を知らないとはまったく思ってもみなかった」Бедные, 11）、息子に寄せるベルタの愛も（「ベルタは度外れに大きくなった自分の愛を心の底では恥じていて、いくらか罪深いものとさえみなしていた」Бедные, 10）、ただ事実として伝えられる。語り手の視点にこだわらず、ある人物から他の人物の内面へと自在に移り変わる素朴な語りも、ウリツカヤ作品に共通する特徴である。

連作「貧乏な親戚」には、個性的な人物が多数登場する。毎月決まった日に裕福な親戚の家で古着や食べ物、お金を貰い、その足で病気の女友だちを訪問して、貰ったものをそっくり施すアーシャ・シャフロン（『貧乏な親戚』）。貧しいけれども極端に気位が高く、人に指図するのが大好きなゲネレおばさん（『ゲネレ－スーモチニツァ』）。15 歳の時に妊娠して放校になり、相手の名を誰にも明かさぬまま 4 人の息子を産むブローニカ（『ブローニカ』）。すぐにわかるように、どの作品をとっても、社会の片隅で生きる人々が描かれている。社会の中心で華々しく活躍している人物や、人も羨むような成功者は登場しない。ウリツカヤ自身も多くの書評も、等しくそのことを認めている。「私の老人たち、貧しい人たち、病人、今ふうに言えばマージナルな人々で、私には十分だ。祖国の文学にとって、これは伝統的なテーマである」と、作家は書いている[15]。「小さな人々」を描くという点で、ウリツカヤは確かにゴーゴリやドストエフスキー以来のロシア文学の伝統に連なる。だが、彼女の作品の「小さな人々」は、ベルタやマチアスのようなおとなしい人々ばかりではないことに留意する必要がある。むしろ、徹底的な仕切り屋のゲネレ－スーモチニツァや、3 度のラーゲリ経験にもめげず元気いっぱいで、女友だちの息子まで誘惑してしまう老女グーリャ（『グーリャ』）、娘の産んだ私生児 4 人をいわば盾にして、台所脇の物置から共同住宅内の一室へ、そして独立したアパートへと、住居獲得に手腕を発揮する掃除婦シームカ（『ブローニカ』）など、強烈な人物が目立つ。マージナルな存在である彼女たちは、地位や財産など失うものが極めて少ないために、行動に自己規制をかけることも少なく、自分の欲求や嗜好に従った生き方をしている。

ウリツカヤの作品は家庭内の出来事、家庭の歴史を主なテーマとするので、探偵小説のようなスリリングな展開や謎解きの興味があるわけではない。子供の誕生や成長、恋愛、家族の病気、老い、死といった平凡な現象がくり返し扱われる。だが、最初の短編集「貧乏な親戚」にすでに現れているように、周縁的存在であるために個性を全面的に発達させた人物が、不足や制限の多い社会体制のもとで、生への旺盛な欲を満たそうとして邁進するとき、曲折に満ちた筋書きが生まれる。ユニークな人物が自分なりに生活していくことが次々に事件を生むような状況が巧みに設定されて、ウリツカヤの作品は物語性の豊かなものになっている。ソ連崩壊と時を同じくするように登場してきたウリツカヤの世界は、

15　*Улицкая Л.* Плохой читатель // Вопросы литературы. 1996. № 1. С. 36.

ソ連文学があまり知らなかった種類の個性的人物たちによる、豊かなストーリー性を持った世界だった。

2-2.「少女たち」「幼年時代 49」

「少女たち」6 編は、「貧乏な親戚」のグループよりは結びつきが強い。時はスターリンが死ぬ 1953 年前後、モスクワの学校で学ぶ 10 代前半の女の子たちをめぐる話だ。1943 年生まれでモスクワ育ちのウリツカヤ自身の記憶に基づく作品群であると考えてよい。

この作品群には、アルメニア人、ユダヤ人、ロシア人、タタール人など様々な民族の少女たちが登場し、「多民族から成る我らが偉大な祖国」のポスターがある教室で、共に学んでいる。「貧乏な親戚」のユダヤ性と対照的に、「少女たち」では多民族性が前面に出ているのだが、それはもちろん諸民族の友好だけを意味するものではない。男女別学の学校で無心に遊んでいるように見える少女たちの現実を、ウリツカヤの筆は、「時代には、その時代なりのうるさい習慣があった。タタール人はタタール人と仲良くして、成績が 3 ばかりの平凡な生徒は平凡な生徒と、医者の子供は医者の子供と仲良くした。ユダヤ人医者の子供は、なおさらだった」(Бедные, 167) と、冷静に伝える。こんな状態だったから、スターリンの死の直前に医師団陰謀事件がもとでユダヤ人への攻撃がはじまり、同級生ターニャ・コーガンの両親がいちはやく彼女をリガの親戚の元に送り出してしまうと、ユダヤ人少女リーリャは、教室で挨拶する相手すらいなくなるのだ。ただ、多民族性はこんな危機的・悲劇的状況でのみ伝えられているわけではない。ロシア人少女の家にユダヤ人もアルメニア人もこだわりなく招待される日常も描かれている（『水ぼうそう』）。

民族の違いもさることながら、少女たちの家庭環境の差が甚だしい。同じロシア人でも、父がノメンクラトゥーラで自分はアメリカ生まれ、エレベーターのあるアパートに住んでいる子もいれば、母やたくさんの兄弟と一室に住み、義父が 4 回も入れ替わった子もいる。社会主義国家ソ連における階層差、貧富の差が、ウリツカヤ作品では鮮烈に描かれる。この連作では、まだ社会経験の少ない少女の視点で物語が進められることによって異化作用が生じ、家庭環境の差がひときわ鮮明になる例が多数ある。たとえば、少女コルィワーノワはあまり成績が悪いので、担任の命令で優等生のリーリャに勉強を教えてもらうことになる。勇んでこの役を引き受けたリーリャは、毎日、コルィワーノワが学校の食堂で貧しい子供のための無償の昼食を食べるのを待ってから、自分の家へ連れて行く（『貧しく幸福なコルィワーノワ』）。

> やさしい家政婦のナースチャがリーリャにキスをした。リーリャがナースチャにキスをする。それから頭の大きい猫が出てきて、木綿の長靴下に包まれたリーリャの足に体をこすりつける。最後に、すごく小さくて、まるで玩具みたいなツィーレチカというおばあさんが出てきて、もうひとつキスが加わる。(…)
>
> それから二人は手を洗って、大きな部屋へ行く。そこには白いクロスをかけたテーブル、絨毯地を張った寝椅子、ピアノ、その他にも立派できれいなものが沢山あって、画面のついたテレビまであった。ナースチャはすぐに、それぞれお皿に載せた二人の昼食を運んできたが、食べ物もやはりすごいものだった。一度はスープの代わりに具のないブイヨンが、取っ手が両脇

についたカップで出されて、それぞれに小さなお皿に載せたピロシキが添えられていたが、そのピロシキは肉入りだったけれど、甘いピロシキみたいにおいしかった。(Бедные, 207)

学校から帰った子供を迎えて繰り返されるキス、食事が銘々の皿で供されること、しゃれた食器、料理のおいしさなど、子供ならではの観察が述べられる。読者は少女の驚きを通して、彼女の家がこれとは全く違うことを知る。子供を視点とする異化作用が生きた作品群である。

「幼年時代 49」もまた、子供を主人公にした作品集である。題にある「49」は 1949 年のことであろう。つまり、「少女たち」で描かれた 50 年代前半より 5 年ほど前で、その分、主人公たちも幼い。掌編と呼べるようなごく短い作品ばかりで、「少女たち」のような筋の展開はなく、それぞれに一つのエピソードが語られている。まだとても貧しく、それだけに人間関係が濃密だった時代の雰囲気が、細かく書き込まれている。父は前線で死に、母も亡くした幼い姉妹が親戚の老婆に引き取られるのが、第一話『キャベツの奇跡』だ。歩くのが不自由になった老婆に代わって、11 月の寒い朝に塩漬け用のキャベツを買う行列に並ぶ女の子たちの姿は、類似の記憶を持つロシアの人々の感情に強く訴えるものであるに違いない。小品であること、舞台が田舎であること、主人公たちが幼いことなどの理由で、この作品群は抒情性が強い。

3. 身体性と世態風俗描写

短編小説を書きはじめた 1980 年代の末、パリ在住の詩人ナターリヤ・ゴルバネフスカヤに数作品を送ったところ、「これこそあなたの世界よ」と大変に喜んでくれたと、ウリツカヤは語っている[16]。ゴルバネフスカヤの言葉通り、ウリツカヤの初期作品は、すでに確固とした彼女らしさ、明確な特徴を備えている。ウリツカヤは 96 年以来立て続けに長編小説を発表して作風も変化しているが、「貧乏な親戚」「少女たち」に現れた特徴は、彼女の創作の核として存続している。これら 2 グループの作品を中心に、以後の作品も適宜取り上げつつ、ウリツカヤの特徴をまとめてみたい。

3-1. 身体性

『幸せな人々』のベルタの涙について述べたように、ウリツカヤの作品では、女性の生理的現象について具体的な描写がめだつ。ヘレナ・ゴスチロによれば、ペレストロイカ以降のロシアでは、女性の体から排出が許されるのは「悲しみの涙と母乳のみ」という従来の規範から逸脱して、「血液、精液、粘液、胆汁、尿、アルコールなどの液体が、女性の身体の孔を出入りする」[17]という状況になった。現代女性文学の多くに見られるこの特徴

16　http://www.litwomen.ru/autogr23.html　ナターリヤ・ゴルバネフスカヤ（1936 年生まれ）は、60 年代にサミズダートの雑誌で詩人として出発、1968 年チェコスロヴァキア侵攻に反対して赤の広場で行われたデモに参加するなど、反体制運動に積極的に関わり、逮捕・精神病院への強制入院を経験した。1975 年に亡命。『コンチネント』『ルースカヤ・ムィスリ』編集に携わる。ウリツカヤの作品はゴルバネフスカヤを通じて、フランスで発表された。

17　Goscilo, *Dehexing Sex,* p. 89.

は、ウリツカヤ作品にも顕著である。

短編『その年の３月２日』の少女リーリャは、悪寒と下腹部の鈍痛に苦しみ、学校から帰ってからソファで寝込んでしまう。夜になってトイレに入ったリーリャは、「下ろしたパンツを見て、空のように青いパンツにチューリップのような血のしみを見つけた」。「彼女はこの瞬間、祖母が前もって言っておいてくれたことを全部忘れた。ひどく厭な気持ちで汚れたパンツを脱ぐと、ひっくり返して置いてある床洗い用のバケツの下に押し込み、ひっかき傷のできた顔を下へ向けて冷たい両手を押し当て、心臓をガラスのように震わせて、死を待ちはじめた…」（Бедные, 176）

医師団陰謀事件が報道されて、ユダヤ人のリーリャは、クラスで口をきいてもらえず嫌がらせも受ける状態が、2 カ月も続いている。教室での孤立と未経験の腹痛の両方に怯える少女の身体感覚を通じて、子供たちをも巻き込むスターリン時代末期の政治状況が明確になってくる。リーリャの苦境を救う思いがけないできごとが続いた緊張した一日の最後に起きたのが、上記の初潮のシーンである。クレムリンでスターリンが死を迎えた日に、少女は下着に血液のしみを見つけ、トイレに閉じこもって自分の死を待つのだ。ユダヤ人であることの社会的意味を短時日のうちに強制的に悟らされた、思春期に入りかけた少女の、精神的にも肉体的にも緊迫した状況が、初潮のシーンでクライマックスを与えられている。

同じ「少女たち」シリーズの『水ぼうそう』には、少女の尿の描写がある。裕福なクラスメートの家に招待されたコルィワーノワは、遊びの最中に尿意を覚え、トイレの場所を訊くゆとりさえなく、外へ飛びだす。アパートの階段の踊り場で、彼女はおしっこをする。暗がりでパンツを下ろしてしゃがみこむと、「その瞬間にレモネードが―科学的には質が低下したが、麦わらのような黄色は保っているレモネードが、彼女からほとばしり出た」と、描写は非常に具体的である。しかも、体内から出た尿の行方まで、微細に描かれる。「たくし上げたコートの下から階段をつたって小川が流れ落ち、彼女を裏切るように下の踊り場へ流れ出る気配を見せたが、流れをゆるめて、洋梨のような形の水溜まりを作りはじめた」（Бедные, 195）

大人の女性を扱った比較的新しい作品になると、さらに多種類の液体が女性の身体の孔を出入りして、身体そのものの描写も露骨さを増す。『ロシア人街の女たち』は、モスクワで一緒に育った女友だちが 10 年ぶりにニューヨークで再会する話だ。3 人の女は深酒をして気持ち悪くなる。エンマの背中をさすってやっていたマルゴは、次第におかしな気持ちになって友だちの体の色々な場所を触っているうちに、乳房にしこりを見つける。マルゴは腫瘍専門の病院に勤務しており、検査のプロなのだ。この作品では、まずたくさんのアルコールが 3 人の女たちの体に入る（ウオッカ、オランダのシェリー、本物のナポレオン、フランスのワイン）。しこりを発見したマルゴは、エンマの乳房を触って指が湿るのを感じて、「乳首から分泌物が出るのは、前からなの」と質問する。友だちの乳癌を発見して一遍に酔いが醒めたマルゴがエンマを浴室へ引っ張っていくと、「エンマは嘔吐した。それからおしっこをした」（Искусство, 219）[18]。アルコール、血液、精液、病気による分泌

18　連作「最初の連中、最後の連中」「貫く線」中の 14 の短編については、*Улицкая Л.* Искусство жить: Рассказы. М., 2004 をテキストとする。出典は（Искусство,）と略記して、（　）内に頁数を示す。

物、吐瀉物、尿など、実に多様な液体・排出物が、女性の身体の孔を通過する。

ゴスチロはペレストロイカ以降の女性文学について、「新しい女性の散文は、グロテスクな肉体にスポットライトを当てる」[19]と述べている。グロテスクな肉体とは、「検閲を受けない肉体、孔と欲望を持ち分裂する肉体、バフチンのいう肉体的下層」であると、彼女は言う。飲食、排泄、性行為が描かれ、出産や病気の場面が多いウリツカヤの作品も、確かに、バフチンの定義するグロテスクな肉体ー「決して出来合いの、完成されたものではない」「生成する肉体」[20]を描いたものといえよう。短編『真珠のスープ』では、施しを受けに来て同情を誘い、隙を見て高価な絨毯を盗んでいったしたたかな女の肉体が、5歳くらいの女の子の目で、次のように描写されている。

> ママがもの問いたげに見つめると、おばさんは期待を裏切らなかったーコートの前をさっと開いて、裸の大きな体を見せたのだ。私はこれを見て息が詰まりそうになった。おっぱいは垂れ下がって、お茶に添えるジャム用の小皿くらいもある大きな乳首で終わっていた。おへそはティーカップくらい。やっぱり黒っぽい色をした深い不揃いな縫い目が、お腹を横切って浮き上がり、その下にはすりきれた毛が三角形のあごひげみたいについていて、全体がなんだか恐ろしい巨人の顔みたいだった。女の人の体みたいじゃなかった。(Искусство, 271)

幼児の視点による異化の作用が、肉体のグロテスク化を強めている。「深い不揃いな縫い目」は、不手際な帝王切開か外科手術の跡を示すものであり、こうしたグロテスクな身体描写にも、ソ連社会に対する作家の冷徹で批判的なまなざしが生きている。「女性の肉体は、その所有者の苦しみと貶めの証明書である。女たちは傷を作り、血を流し、骨折する。女たちは強姦、出産、中絶、殴打、病気に耐える」[21]と、ゴスチロはフェミニストとして述べる。絨毯を盗んだ女の身体は、まさに貶められ苦しんできた彼女の過去の証明書である。

女たちの身体が所有者の生を証明するのは、彼女たちが身体で生を受け止めるからである。女性の身体の孔を様々な液体が出入りする『ロシア人街の女たち』では、女性たちの性的経験も具体的に描写されている。泥酔した夫とのセックスに関する回想は、ごく短い文ではあるが、自分の上でうごめく90キロの体、殴打、胸に1年も残る青あざ、口や下腹部の悪臭、そして自分を襲う吐き気と、非常に生々しい（Искусство, 212)。重さ、痛み、匂いなど多種類の感覚が動員されて、やりきれない全体的不快感がよみがえる。愛してはいたがアルコール依存症であったために離婚した夫との生活の一面を、ウリツカヤは妻の身体感覚の記憶を赤裸々に描写することによって伝える。

長編『陽気なお葬式』では、ニューヨークの夏の蒸し暑さも、女性の身体と結びつけて表現されている。「服はとっくの昔に着るのをやめていた。ただワレンチナだけがブラジャーをはずさなかったが、それは、もし大きな胸を自由に揺らしておくと、胸の下に赤

19　Goscilo, *Dehexing Sex,* p. 89.

20　ミハイール・バフチーン著、川端香男里訳『フランソワ・ラブレーの作品と中世ルネッサンスの民衆文化』せりか書房、1980年、280頁。

21　Goscilo, *Dehexing Sex,* p. 89.

ん坊みたいなただれができるからだった。(…) 全員の体が濡れていて、体表から水分が蒸発せず、タオルは乾かず、髪の毛はドライヤーを使わないと乾かなかった」(Бедные, 277)。クーラーのきかない部屋にいる女たちの体のべたつきが伝わってくるような、実感にみちた文章だ。ウリツカヤの叙述は、このように感覚的な作用を持つ。

身体描写、特に女性の身体描写が多いこと、その描写にグロテスクの傾向があり、「肉体的下層」が描かれていることは、ウリツカヤだけではなく、現代ロシア女性文学に共通する特徴であると言ってよい。現代女性文学をバフチンとの関連で考察した論文や、ペトルシェフスカヤとトルスタヤの文学をバフチンのグロテスク概念でとらえた論文も書かれている[22]。また、暴力、性行為、排泄行為などをあからさまに書くのは、90 年代以降にロシア文学で主流と言えるほどに発展したポストモダン的傾向の特色でもある。ウリツカヤも現代作家のひとりとして、イデオロギーに支配されたソ連の公式的文化観では蔑ろにされていた身体感覚や感覚的記憶が持つ力の大きさを、強く意識している。頭脳のみによる記憶に抗するように、ウリツカヤは記憶を感覚的に蘇らせる。その際のウリツカヤの特徴として挙げておきたいのは、ポストモダン文学が戦略的に用いる俗語や卑語を用いないことである[23]。また、閉じられていない身体を描くけれども、それにはバフチンがグロテスクの要素として規定した過剰さ、過大さ、法外さは付加されていない。すなわち、女性の身体そのものや性行為・排泄行為等を具体的に描写するという点ではソ連的規範を逸脱するが、その描写をことさらに格下げすることはせず、あくまで人間の自然な行為として書く。『ロシア人街の女たち』のように性行為が具体的に描かれるのは、不快な強制的行為の場合であって、そうした描写の例は多くない。幸せな結びつきは、「こうして朝の光がさしこむころにはソーネチカはほほえみ、みずからの肉体で、自分とは切り離せない大切なふたりの飢えを、黙々と、喜んで、癒してやっているのだった」[24]（娘に授乳しているソーネチカを夫が引き寄せる場面）のように、直接的描写はなくて、抒情的にまとめられる場合が多い。

3-2. 世態風俗描写とディテール

ウリツカヤの作品は政治的・社会的事件を直接取り上げることはなく、あくまで個人的・家庭的な小さな物語がテーマなので、生活上の瑣事をきめ細かに描くことが、作品世界を現実的なものとして成り立たせる要因となる。ディテールが描き込まれると、次のように買い物さえもひとつの物語になる。作品『ゲネレ－スーモチニツァ』で、ふだんは非常につましい生活をしている女主人公が、鶏を一羽買いに行く場面である。

一年に一度、パスハにゲネレは鶏を買った。実際、この鶏こそパスハだった。買い物に行く日、

---

22 Caryl Emerson, “Bakhtin and Women: A Nontopic with Immense Implications,” in Helena Goscilo, ed., *Fruits of Her Plume, Essays on Contemporary Russian Woman's Culture* (New York: M.E. Sharpe, 1993), pp. 3-20; Natal'ia Ivanova, “Bakhtin's Concept of the Grotesque and the Art of Petrushevskaia and Tolstaia,” in Goscilo, ed., *Fruits of Her Plume,* pp. 21-32.

23 たとえば блядь（淫売、あばずれ）という語を、ウリツカヤは直接書かない。「彼女が生涯の最後まで一回も声に出しては言わなかった、5 文字の恐ろしい言葉」を、別の女の子は「ママという言葉の次に、口に出して言うことを覚えた」などと書く（Бедные, 178）。

24 ウリツカヤ『ソーネチカ』42-43 頁。

彼女は夜が明ける頃に起き、時間をかけて入念に身支度をして、絹製の丈夫な網袋に黒い撚り紐と古新聞を一束つっこむと、朝の5時に家を出た。始発の路面電車でペトロフカからツヴェトノイ並木通まで行き、そこから歩いて、市場が開く20分ほど前に中央市場に着く。長いこと、時には2時間も、彼女は「自分の」売り手が来るのを待った。それは褐色の肌をした片目のユダヤ人で、いまどき珍しい商売ーコッコッと鳴く生きた品物を扱う商売をやっていた。どうやらゲネレ同様に売り手にも、奇妙な自分なりの生活の掟があるようだった。つまり彼は、台の上に一度に一羽しか鶏を置こうとしなかった。ゲネレはゲネレで、自分の掟にしたがって、たとえこの上なくすばらしい鶏であっても、他の鶏も全部、入念に触りまくってからでないと、買うことはできないのだった。(Бедные, 43)

台の上に一羽だけ鶏を置くことを原則としている売り手と、すべての品物を確かめてから選ぶことを原則にしているゲネレおばさんは、どちらも、例えばファジル・イスカンデルの作品の登場人物にも通じる根本的な滑稽さを備えている。鶏を買うという何でもない場面でありながら、売り手と買い手の個性のぶつかり合いが自然に筋書きを展開させ、同時にゲネレの生活において、この買い物がいかに大きな意味を持つかを読者に伝える。ウリツカヤ作品の豊かなストーリー性は、個性のはっきりした人物を描き出し、その個性が十分に発揮されるような状況を設定すること、そしてその状況が自然に展開していく様を、適切なディテールを導入して描き込むことから発生する。いつでも個人の日常に関わるシチュエーションが選ばれるので、日常的な事物の描写の腕が問われることになる。

ウリツカヤは最初の作品集から、その分野でうまさを発揮し、「風俗描写 (бытописание) の名手」と認められてきた。新作の書評にはしばしばこの賛辞が見られる[25]。上の引用では、ゲネレの持ち物が細かく描写され、路面電車の停留所の名前は固有名詞で示されている。こうしたディテールの豊富さと確かなレアリアが、ウリツカヤの作品世界を作り上げている。「誇り高い貧困」に生き、「なんでも最上のものを買う」ことにしているゲネレおばさんが、パンはフィリッポフのパン屋で世界で最高の白パンを2日に1個、チーズはエリセーエフの店でスイス・チーズを100グラム買うというくだりは、ゲネレという作中人物を活写すると同時に、ある時代のモスクワの暮らしを生き生きと再現する (Бедные, 42-43)。

日常の瑣事を書き込むウリツカヤの傾向は、その後も変わっていない。最近の長編『心を込めて、あなたのシューリク』を見ると、たとえば主人公シューリクが関係する女のひとりワレーリヤが特別に誂える靴の話や (Шурик, 219)[26]、もうひとりの女スヴェトラーナがレインコートを新調することを決心してから縫い上げるまでの様子が、アカーキー・アカーキエヴィチの外套作りさながらの綿密さで描かれている (Шурик, 262-263)[27]。シューリクは周囲の女たち全員にとことん親切にしてやる青年だが（それには病院への付

25　*Ермошина Г.* Рецензия на роман «Путешествие в седьмую сторону света» // Знамя. 2000. № 12. С. 201; *Цуркан А.* Единство в многообразии, или народ избранный // Старое литературное обозрение. 2001. № 2. http://magazines.russ.ru/slo/2001/2/curk.html

26　長編『心を込めて、あなたのシューリク』については、*Улицкая Л.* Искренне Ваш Шурик. М., 2004. をテキストとする。出典は（Шурик,）と略記し、（　）内に頁数を示す。

27　ウリツカヤはこの場面でゴーゴリの『外套』を意識して、「有名な外套の原型みたいなレインコート」（Шурик, 263）と、『外套』に言及している。

き添い、買い物やペットの世話、女たちの性的要求に応えることまで含まれる)、その彼のある一日を描いた第 39 章は、市井の人の日常を描き尽くすウリツカヤの作風の真骨頂を示している。モスクワオリンピックを見物に来たフランス人旅行団の通訳の仕事をしながら(この日が最終日で、ホテルから空港に送って行く仕事がある)、シューリクは女たちがそれぞれに果てしなくつきつける要求や依頼をすべてこなしていくのだ。「6 時半には家に着いて、買ってあった薬をひっつかむと、マチルダに頼まれた証明書を取りに遠いチェルターノヴォへ出かけ、そこからナツィオナーリ・ホテルへ、ナツィオナーリからシェレメチェヴォ空港へ、シェレメチェヴォからレニングラード駅へ行った」(Шурик, 239) と、シンプルでリズミカルな文の中には例によって現実の地名が書き込まれ、読者はシューリクと共にモスクワの町をあたふたと駆け回る気分にさせられる。

ある家族の数十年にわたる歴史を書いた長編小説『クコツキーの症例』は 4 部から成るが、その第 2 部では、全体的に夢の世界が描かれている。固有の名前ではなく、「新しい女」などと象徴的に呼ばれる一群の男女が、砂漠のような空間を放浪している。その人物たちは次第に第 1 部の登場人物の像と重なり合うが、作品内の現実に立ち返ることはなく、時間のない世界をさまよう。主人公パーヴェル・クコツキーがレフ・トルストイを訪ねて愛について語り合ったり、妻エレーナと抱き合い、作品内の現実世界では永遠に失われてしまった至福を経験したりする。これは、時間と場所を特定できる現実的な世界しか描いてこなかったウリツカヤが、ヴァーチャル世界を書いたほぼ唯一の試みである。

『クコツキー』第 2 部で仮想世界を書いたあと、『シューリク』においてウリツカヤは再び、前期短編のような細部にこだわった風俗描写に力を入れている。『シューリク』は長編でありながら、すでに述べたように細部描写が特徴的である。青年シューリクは翻訳仕事をしながら、母をはじめ周りの女たちの用を足すために日々走り回っている。組織に属さず、社会的なことに何の関心もない彼の日常は、周囲の人々に関わる瑣事だけで成り立っているのだ。徹底して個人的なことだけを連ねた叙述で、私たちは現代の余計者とも言えるアレクサンドル・コルンという青年を知る。

物語の最後に、シューリクは女友だちリーリャに頼まれて、まったく面識のない老婆に品物を届けにいく。大きな箱をかつぎ、地下鉄と 2 つのバスを乗り継いで届けたのに、老婆には納得できないことがあって、その箱に入っていた大量の毛糸の束を引き取れと、無理なことを言う。断られた老婆が泣きだす、シューリクが水を飲ませるが、なおも泣きわめくというドタバタ・シーンのあと、老婆は突如泣きやみ、何の前置きもなく実際的な質問をする。

「ちょいとお尋ねしますが、あなたアルバート街に行くことはある?」
「あります」
「あの通りに〈手芸材料なら何でも〉っていう店があるの、知ってます?」
「正直言って、知りません」とシューリクは言った。
「あるんですよ。その店へ行って、私にかぎ針を買ってきて。どんなのか、見せましょう。ほら、私のかぎ針は折れちゃってるでしょう。サイズは 24。22 は私にはだめなの。わかりました? 24 号、絶対にね! そして、ここへ持ってらっしゃい。私は出かけることはありませんから、いつでも結構」

シューリクは黄ばんだ細い木の植わった小道をバス停の方へ歩きながら、微笑んでいた。リーリカは去って行った。そして恐らく二度とやって来ない。でも彼は子供時代のように、気分が良かった。自分は幸福で自由だと感じていた。(Шурик, 445)

徹底して自己中心的な老婆と、人の頼みを断れないシューリクがぶつかりあった状況設定、それに加えて通りや店の名前、かぎ針の号数と、老婆が繰り出してくるディテールの積み重ねから滑稽さが生じるのは、『ゲネレ－スーモチニツァ』における鶏の売買と同じ構造である。シューリクは老婆の理不尽な頼みを文句も言わずにかなえてやり、それはまた当然のように次の頼みにつながるであろうこと、シューリクの一生はこうしたことの繰り返しに費やされるであろうことが想像される。シューリクにとっては、瑣事、雑事こそ生の本質なのだ。シューリクと 12 年ぶりに再会した初恋の相手リーリャは、「シューリクに個人的生活なんて、あるのかな。ありそうにないわ。想像できないもの。でも彼には何か特別なところがあるーちょっと聖人みたい。でも完全なダメ男ね」(Шурик, 446) と考える。このシューリク評も、また上の引用でシューリクが感じる唐突な幸福感も、登場人物の感情や心理の描写によって納得させられるのではなく、ディテールが積み重ねられた結果、自然に理解できるものである。つまり、世態風俗描写（бытописание）の力によるものだ。

3-3. 世態風俗描写の解釈・意義

ここで、ソ連文学において、世態風俗描写の巧みさは必ずしも賞賛されてこなかったことを思い出しておきたい。家庭や恋愛といった生活の個人的側面への過度の関心は、集団性を重んじる社会主義体制の規範からの離反とみなし得る。風俗描写の巧みさは、イデオロギー性の欠如と同一視され、ハイブラウな文学ではない証拠と目されることにもなった。こうした批判が、特に女性作家に多く向けられてきたことを、思い起こす必要がある。

1920 年代には、個人的生活、恋愛、家庭生活に関連するすべてのことが、雄々しくて禁欲的な革命精神と相容れない「プチブル的俗悪さ」として批判されたと、スヴェトラーナ・ボイムは述べている[28]。革命時代から遠ざかるにつれて、生活の個人的・家庭的要素への関心は復活して次第に高まっていく。特に第二次大戦後は、家庭や個人的生活を中心に据えた作品が増えてきたが、そうした作品の特色となる世態風俗描写に関して、疑惑の目で見る傾向は根強かった。それを示す例として、ある書評を取り上げたい。スターリン時代の終焉から四半世紀経ち、雪解けの時代さえ遠くなった 1978 年に書かれた論評である。

イ・グレーコワ（1907 年生まれ）は 1978 年に、大学の教員や学生たちの日常を描いた中編小説『大学教師 Кафедра』を発表した。それに対するアッラ・ラトィニナの書評「世態風俗描写の光と影」が、独特の文学観を示すものとして興味深い[29]。ラトィニナは、『大学教師』はおもしろくて一気に読めるけれども、終わり方が唐突だと不満を述べている。人生の一断片はどんな箇所でも突然に途切れることがあり得るから、自然さとか真実らし

28 Svetlana Boym, “The Poetics of Banalty, Tat'iana Tolstaia, Lana Gogoberidze, and Larisa Zvezdochetova,” in Goscilo, ed., *Fruits of Her Plume,* p. 65.

29 *Латынина А.* Свет и тени бытописания // Литературное обозрение. 1979. № 1. С. 47- 49.

さという尺度で見れば、グレーコワ作品は高く評価できると、ラトィニナは言う。「しかし、文学ー偉大なる文学ーというものは、より高度に組織された形態を創造する点で、人生とは異なる。大芸術作品の世界は、現実の世界と関連はしているが、それとは違う世界なのだ。」実にロシア的な文学中心主義は、次の例でいっそう強く示される。「たとえばドストエフスキーによって世界を研究するなんて無分別の限りだが、このまったく特別な法則にしたがって形成された世界が存在するおかげで、人生でいかに多くのことが解明されるだろう。」

ここで評者は、文学に「偉大な великий」「大いなる крупный」という形容を付し、「大文学」の作品に、現実と関連しているがそれとは別個の世界、ハイパーリアリティを見て、それを基に人生が解明できるとしている。こうした視点に立って、「グレーコワの作品に大文学の尺度でアプローチすることは公正であろうか」という疑問を呈したラトィニナは、グレーコワを「風俗作家 художник-бытописатель」と規定する。風俗作家という言葉に、「今日の批評家たちの論文に聞き取れる、尊大な軽蔑的な調子を与えるつもりはない」とラトィニナは断っている。しかし、「風俗描写というのは、偉大な文学がそこから成長して行くための肥沃な土壌である」と語っているように、ラトィニナが「大芸術」作品と風俗小説を別の次元のものとして捉えているのは明らかである。アッラ・ラトィニナ（1940年生まれ）は、1969-92年の長きにわたって「文学新聞」の編集に携わり、ペレストロイカ期にも活発に評論活動を続けてきた、実績ある批評家である。わずか2、3ページの書評をもとに彼女の文学観の傾向や特色を論じるつもりはなく、「風俗描写」という語のある意味で典型的な使用例として、彼女の論評を取り上げたのである。

風俗描写という語にはこうした含みがあり、ウリツカヤを風俗描写の名手と評することの裏にはこうした文学観が存在していることを忘れてはならない。だが、徹底して私的生活だけを書き、作品を日常的ディテールで埋め尽くすウリツカヤは、そのことを十分に意識しているように思われる。そのような作品を生産し続けることは、イデオロギーや社会性を重視して、身体性や個人性を軽視してきた文化・文学へのアンチテーゼになり得る。個人を描き、家庭を描くことによって、「大文学」の規範に挑戦できる。

ベス・ホルムグレンは、女性作家全体に、個人的なことや物質的なことを書く傾向があると指摘し、それに重大な意味を与えている[30]。彼女によれば、文学における個人や家庭の重視は、すでにスターリン時代に存在していた。「肉体的勇敢さ、技術的達成、社会的積極性に重きを置くスターリン時代は、暗黙のうちに家庭的領域に異論派的価値を投げかけた」という。個々の才能がどんなに異なっていても、ソ連の女性作家は、家庭的なこと、物質的な意味での安楽さ、ロマンティックな恋愛を含む感情面のこと、個人的なことについて書く権威を認められていたと、ホルムグレンは述べる。ドメスティックな領域を書くことに異論派的価値が付与されてきたという指摘は興味深い。女性作家がドメスティックな領域を得意とすることは、たとえば日本では、「女は家庭に」という守旧派的傾向を表すと解釈される可能性もあるが、ロシアでは状況は異なるというのだ。貝澤哉の紹介によれ

30 Beth Holmgren, “Writing the Female Body Politic (1945-1985),” in Adele Marie Barker and Jehhane M. Gheith, eds., *A History of Women's Writing in Russia* (Cambridge: Cambridge University Press, 2002), pp. 225-242.

ば、ウクライナのフェミニズム研究者イリーナ・ジェレプキナは、ソヴィエト社会について、「主体がプライヴェートな性的主体であることを禁止し、つねにパブリック・コレクティヴで規範的・社会的なものとして主体を構成するようコントロールしてきた」と述べている[31]。こうした社会状況では、家庭、物質面での安楽、恋愛や性的関係などプライヴェートな領域を、それ自体の価値を認めて描き出すことは、社会的強制に抗してプライヴェートな主体であろうとする意志の表明とみなすことができる。

さてホルムグレンはさらに、「異論派的要素と家庭的要素の融合が、女性に作家および作中人物としての権限を与えてきた」という従来の自分の主張を、少し訂正・拡大して、「戦後期（1945-85）は、政治的迫害によって価値付けられた作家たちだけでなく、**すべての**女性作家に好都合な時期であった（強調は原文による）」と主張したいと述べている。確かに、ソ連文学史をふりかえってみると、第二次世界大戦後に女性作家が次々に現れている。スターリン賞を例にとると、ヴェーラ・パノーワ（1907-73）が1947年、1948年、1950年と3度も受賞、アントニナ・コプチャーエワ（1909-91）が1949年、ガリーナ・ニコラーエワ（1911-63）が1951年に受賞しており、終戦後の女性作家の活躍ぶりは明らかである。ロシア・ソ連文学は男性作家優位の文学とみなされてきたが、実は、女性作家の活躍という現象は、大きな流れとしてはすでに半世紀前にはじまっていたことになる。ペレストロイカ期からポストソヴィエト期に多数の女性作家が出現したことについては、驚きをこめて様々に論じられてきた。ホルムグレンがすべての女性作家に有利だったと考えているソ連時代後半の社会・文学状況を考慮に入れて、ロシア女性文学の歴史を検討すると、停滞はあっても後退することはなかった女性進出の大きな流れが、1980年代以降に一気に成果をもたらしたという見方もできよう。ウリツカヤ作品をテーマとする本論では、ロシア女性文学については以上の概略的考察に留めたい。

4. ウリツカヤ作品の登場人物

4-1. 周縁の人物たち

初期短編群の総題「貧乏な親戚」「少女たち」は、ウリツカヤがどんな主人公たちを引き連れて登場したかを、端的に語っている。貧しい人々、子供、女性、老人、病人たちが、彼女の世界の主要人物である。「今ふうに言えばマージナルな人々」と、作家自身が規定している（注14参照）。「私が関心を持っているのは、ソ連的な人ではなく、ともかくそうした社会意識の外にいる人たち。病人や老人、障害者、精神病の人など、今の言葉でいうアウトサイダーなんです」とも語っている[32]。

障害者を例にとれば、ダウン症の女の子ミーラ、同じような障害を持ち彼女と結婚するグリゴリー（『ブハラの娘』）、両手のないトーマ（『人の手の技ならぬ贈り物』）、片目の家

31　貝澤哉「ジェンダー研究におけるロシアの現在、または、ロシアにおけるジェンダー研究の現在：イリーナ・ジェレプキナ『熱情』『ジェンダー的90年代』を読む」『現代文芸研究のフロンティア（VI）』（「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 No. 4）北海道大学スラブ研究センター、2004年、8-9頁。

32　Литературная газета. 20 сен. 1995 (№ 38). С. 3. 訳は沼野恭子による。沼野恭子「ウリツカヤの静謐なまなざし」沼野『アヴァンギャルドな女たち：ロシアの女性文化』五柳書院、2003年、158頁。

政婦ワシリーサ（『クコツキーの症例』）、ポリオの後遺症で足が不自由なワレーリヤ、小人症のジャンナ（『シューリク』）などが思い浮かぶ。短編『選ばれた民』には、多くの障害者が登場する。ジナイーダはお金の計算もできないほど知能が低く、食べるのをやめられないので、電車に乗れないくらい異常に太っている。母に死なれてお金も尽きた彼女は、教会へ物乞いに出かける。新入りが来るのを嫌った他の乞食たちに攻撃されたジナイーダを、松葉杖をついたカーチャが助ける。やはり物乞いで暮らすカーチャは、あるときジナイーダに向かって、手も足もない修道女とその母のことを語る。ラーゲリで刑期を終えたものの、生きる手だてがなくなって教会へ立ち寄ったカーチャは、ネズミともカエルともつかぬ、未知の獣のようなものを見る。手足のない重度の障害者である修道女エヴドキヤが、毛布にくるまれ、やはり修道女である母に背負われて祈禱に参加していたのだ。『選ばれた民』は、乞食と不具者しか登場しない異様な小説である。健全な身体を賛美する社会的風潮の中で、不具者は取り上げにくい存在だった。まして乞食は、ソ連においては文学で取り上げるどころか、存在自体が認められていなかった。作品『真珠のスープ』では、アパートの階段下に住み着いた二人の乞食が、革命30周年を迎えたモスクワの町から排除される様が書かれている。

乞食と同様に、ペレストロイカ以前のソ連文学ではほぼ見られなかった種類の人物が、ウリツカヤ作品には数多く登場する。長編『クコツキーの症例』を取り上げると、クコツキーの妻エレーナの両親はトルストイ主義者だった。アルタイ地方で農業コンミューンを指導していた彼らは、30年代に粛清される。革命後のトルストイ主義者の運命のひとつに、我々はこの作品で出会う。クコツキー家の家政婦のワシリーサは修道院で育てられた孤児であり、老いるまで独特の宗教的な人生観を保持している。クコツキーの友人の妻は、シベリアの古儀式派の村の出身である。宗教的な下地を持った人々だけでも、このように多様である。

性的な意味でのアウトサイダーも取り上げられている。短編『可愛い人』[33]は、少年時代に古典学の教授に引き取られて、同性愛者として育てられた男の話である。これもソ連時代には禁忌のテーマだった。ホモセクシュアリズムは、ブルジョワ階級の腐敗の産物、すなわち直接的な反革命行為として、1934年に法的に禁止された。「はじめ彼は5年をくらったが、そこでさらに追加されたので、ほぼ10年間姿を消していた」(Искусство, 140)という文は、主人公が同性愛の罪で逮捕されてラーゲリ送りになったことを示している。その後も何回か知り合いの前から姿を消し（つまり逮捕され）、最後にイズマイロフスキー公園で無残な死体となって発見されるが、同性愛者どうしの殺人事件とみなされ、捜査もろくに行われない。ウリツカヤらしい滑稽味も抒情性もなく、陰惨な印象を与える作品である。「ロシアの性文化」の著者コーンによれば、同性愛が法律で禁止された1934年からペレストロイカが始まる86年までの、ソヴィエト社会における性的マイノリティへの態度は、「刑事訴追、差別、黙殺」と総括される[34]。性的偏見の強い社会で、「訴追や脅迫を受けるばかりか、適正な自己認識を得ることも、自分が何者かを理解することもできなかっ

33　原題「Голубчик」は、主に男性に対する愛情を込めた呼びかけだが、ホモセクシュアルを意味する隠語 голубой を暗示すると考えられる。

34　*Кон И.С.* Сексуальная культура в России. М., 1997. С. 354.

た」[35]同性愛者たちの救いのない状況が、この作品に反映している。

貧者、老人、病人などに、宗教的・性的アウトサイダーも加わって、ウリツカヤの作品では、弱者・被差別者の側から見たソ連社会が描き出される。ユダヤ人の登場人物が多いことも、アウトサイダーの種類を増やしている。作品中のユダヤ系の人々は、ラーゲリ経験者や亡命者であることが多い。たとえば、遺伝学者イリヤ・ゴリドベルグは、数回のラーゲリ経験の後、亡命先のアメリカで著名な学者になる（『クコツキーの症例』）。学問とは縁のない『グーリャ』の女主人公も、3度もラーゲリを経験している。『陽気なお葬式』はニューヨークに暮らすユダヤ系亡命者の物語だ。

以上のようなウリツカヤの登場人物たちは、イデオロギーとは無縁に生きている。ソ連的社会意識を意に介しない生き方そのものが反ソヴィエト的姿勢を示しており、彼らがあらためてそれを言葉にすることはない。初期短編『ブローニカ』の女主人公は、15歳で妊娠して放校になる。母親や近所の女たちが四六時中監視する中で、相手が誰かを悟られずに4人の男の子を生む。約40年後に同級生と再会したブローニカは、「子供の頃、私は本当に狂ってた。夢を見てるみたいに生きてた。今に目が覚める、そしたら何もかもよくなる、正しくなるって、いつもそんな気がしてた。どういうのが正しいのかは、わかっていなかったけれど。ただ、人は、私たちが生きていたようには生きていけないものだってことは、わかってた」（Бедные, 34）と語る。これは、ウリツカヤが登場人物に直接的にソ連社会への嫌悪を語らせた珍しい例である。論理的な抗議ではなく、15歳の少女の深い嫌悪感によって、反ソヴィエト的姿勢が表現される。少女は、自分の送りたい生活が未来に待っているのではなく、過去に存在していたことを知り、革命前の大学生に、つまり現在は老人である隣人に激しい恋をするのである。

ウリツカヤ作品の登場人物のほとんどはマージナルな存在だが、それは彼らが社会の犠牲者であることを意味してはいない。彼らはむしろ、マージナルな存在であるがゆえに自分の欲望に忠実で、それを実行するための強い意志と現実感覚を備えている。ブローニカもぼんやりした少女だったのに、生まれ変わったような強さを発揮して、どんなに責められても子供たちの父親の名を明かさず、50歳以上も年の違う男を守り抜く。この関係が発覚すれば、相手の男は未成年者への暴行の罪で、同性愛者と同様に犯罪者として逮捕される状況だったのだ。『ツュ－ユーリッヒ』の女主人公リジヤもまた、ソ連的生活を嫌悪し、ソ連から出て行くため、博覧会場でスイス人に目をつけ、あらゆる手管を使って結婚までこぎつける。ウリツカヤの描くマージナルな女たちは、納得のいく買い物をするため、気に入った男を自分のものにするため、恋の相手を守るため、ソ連から出て行くため、全力を傾ける。

ウリツカヤは、そんな女たちに理解を示すことも断罪することもせず、ただ状況や行動を淡々と伝える。ソーネチカやブローニカの至高の愛も、ゲネレやグーリャが自分の原則や欲望にしたがって突っ走る様子も、作品世界の現実として示されるだけだ。沼野恭子は『ソーネチカ』について、「ソーネチカの心の機微をたくみに伝える語り手は、それを手放しで称賛するでも、冷たく非難するでもなく、ごく自然に受け入れる姿勢を貫いている」

35　*Кон.* Сексуальная культура. С. 355.

と述べている[36]。沼野の言うように、「語り手の距離の絶妙」さは、ウリツカヤの大きな特色である。

4-2. 母たちの像

現代ロシア文学で描かれる家族について沼野恭子は、「父の不在・母の横溢」という特色を指摘した[37]。ウリツカヤの作品にも、たくさんの「父親不在」が見受けられる。短編『ブローニカ』『ブハラの娘』『選ばれた民』『スペードの女王』などで、母子だけの家庭が描かれている。『スペードの女王』では、曽祖母から孫まで4代の家族が住んでいるのに、父は一人もおらず、男性は8歳の子供だけである。長編『シューリク』の家族も、祖母と母と男の子で構成されている。『クコツキーの症例』の主人公パーヴェル・クコツキーには愛する娘ターニャがいるが、この二人は実の親子ではない。『スペードの女王』に、「よくあることだが、代が替わるごとに、父親不在という家庭の伝統は強まって行った」という一文がある（Искусство, 90）。他の女性作家と同様に、ウリツカヤの作品もまさに「父親不在 безотцовщина」の世界であり、その代わり母親が数えきれないほど多く登場する。

たくさんの母親の中には、46歳で産んだ息子を幼くして死なせてしまったベルタもいれば（『幸せな人々』）、父親不在のまま10代で次々と子供を産んだブローニカもいる。信じられないような自己中心ぶりで娘を苦しめる90歳のムールもいれば（『スペードの女王』）、愛する者の行動すべてを容認するソーネチカもいる。ひとり娘を交通事故で失って精神を病み、幼い孫娘を自殺未遂に追い込む母親もいる（『メディアとその子供たち』）。ウリツカヤの筆は驚くほど多様な母親像を描き出す。

そうした中で、違う作品でありながら、きわめてよく似た母親像・女性像が登場する。同じタイプの人物像は、それが作家にとって重要なイメージであることを示している。ここでは二つのタイプを検討する。

4-2-1. 聖なる愚者としての母

『クコツキーの症例』で、主人公の妻エレーナは、原因不明のまま次第に知力が衰退していく。妊娠中絶の是非をめぐる議論で夫と対立し、彼女が子宮を失った体であることを指摘した夫の一言が原因で、夫婦の関係に決定的な亀裂が生じる。こまやかな愛情もあり、互いの理解者でありながら、夫とベッドを共にするのをやめた頃から、エレーナの頭脳の衰えは進行していく。発病後30年ほどが経過した長編のエピローグでは、夫も一人娘も先に逝き、言語能力をほぼ失ったエレーナの姿が描かれる。現実の状況をまったく理解していないようでありながら、時に本質的な洞察力を見せるエレーナは、ユロージヴァヤを思わせる存在である。

エレーナを入浴させる場面が、作品中で二度繰り返される。一度目は娘のターニャが、二度目はそれから20年ほど後に、同じ浴室で孫のジェーニャがエレーナを洗ってやる。ジェーニャは身重の体で日曜ごとにやって来て、祖母のおむつなどを洗濯し、体も頭も洗っ

36　沼野「ウリツカヤの静謐なまなざし」158頁。
37　沼野恭子「父の不在・母の横溢：現代ロシア文学における家族像」沼野『アヴァンギャルドな女たち』38-47頁。

てやる。エレーナが着ているものの粗末さ、たらいに浸けられたおむつの悪臭など、ウリツカヤ特有のディテールによって、同居している養女夫婦がエレーナの世話をしていない状況が明らかになる。そして、エレーナはお湯に入って気持ち良くなったところで、口をききはじめる。同居しているトーマは、エレーナがもはや何もしゃべらないと信じ込んでいるが、掛け金をかけた浴室の中で、彼女は週に一度孫と言葉をかわすのだ。エレーナには話の相手が誰か正確に把握はできていないが、会話は本質的な優しさに満ちている。「ジェーニャがもう10年もそのためにここへ通っていることが、今はじまる」と、その場面は書き起こされる。「ジェーニャが記憶している限り、祖母はずっと病気だった。そして彼女たちは愛し合っていた。もしも、言葉のない、行動のない、空気のような、何ひとつ実際的なことに基づいていない愛というものが、存在し得るとすれば」[38]と、二人の愛情が説明される。一人娘を亡くしたことさえ分からぬ老女が、汚物が臭う浴室で孫娘とひそやかに交わす会話、言葉を完全に失ったと思われている祖母が孫娘と交わす奇跡のような会話は、ウリツカヤの創作全体の中でもっとも美しい場面のひとつであろう。崇高な愛の場面が、悪臭、病み衰えたエレーナの裸体、腹部の傷跡、床擦れになりそうなただれなど、生理的描写に満ちていること、浴室にごたごたと置かれたたらいや桶、ぼろぼろのタワシ、すりきれたスリッパ、古びたバスタオルなど、トーマの吝嗇さを反映した醜悪なディテールで構成されていることも、ウリツカヤの特色をよく示している。

エレーナの病気は、メンタルな原因によると思われる不思議なものだ。初期の短編『リャーリャの家』のヒロインも、やはり精神的ショックから知力を失う。元気いっぱいで次々に不倫をして生活を楽しんでいた知的な女性が、一夜にして、たえず涙を流す哀れな老婆になってしまうのだ。何を見ても哀れがって、「かわいそうな子、かわいそうなお鍋、かわいそうな階段…」と呟いて泣く姿には、エレーナと共通する聖性が感じられる。

作品群「少女たち」の中の『他人の子』と『捨て子』にも、突然に知力を失う母親が登場する。戦時中に双子の娘を生んだアルメニア人のマルガリータは、前線にいる夫から不倫と決めつけた手紙を受け取ったショックで、赤ん坊の世話どころか、食事や排泄も一人ではできない病人になってしまう。それほど愛していた夫が復員してきたことも理解できず、母に世話をされて日を過ごす状態は、エレーナと同様である。そしてこのマルガリータも、周囲の状況は認識できていないのに、娘の一人がいなくなると、即座にそれを察知して夫に告げる。何か話が通じることを期待して、夕方のラジオ番組のことなど話しかけている夫に、突然マルガリータが「ガヤネはどこ？」と、娘の居場所を尋ねる。数年ぶりにマルガリータが自分から口をきいたので、質問の意味も理解できないほどあわてる夫と母親に、彼女は同じ問いを3回くりかえす。知力を失った女が不思議な言葉を発するという構図は、『クコツキーの症例』と同じである。

ウリツカヤ作品において、突然に、あるいは緩慢な進行で知力を失っていく女性たちは、そのきっかけとして深い悲しみやショックを経験している。意志や気力で悲しみを乗り越えるのではなく、身体全体が衝撃を吸収したとも言える。次第に認識能力が薄れて、記憶や言語能力が衰退して行く過程は、『クコツキーの症例』で、エレーナの日記によって表現

38　*Улицкая Л.* Казус Кукоцкого. М., 2000. С. 442.

されている。正気を失った母たちは、その代わりに超自然的な愛の力、神聖さに通じる崇高さを得て、非常に印象的な存在となっている。

4-2-2. 賢明な母

聖なる愚者として分類したマルガリータ（『他人の子』『捨て子』）は、正気を失ってから、母に面倒を見てもらっている。母親のエンマ・アショートヴナは、娘の世話をしながら双子の孫たちを育てる。そして娘の夫セルゴが復員してきたとき、エンマは娘を病気にしたセルゴへの恨みを忘れて、彼を家に留まらせるために、持てる知恵のすべてを使う。「エンマ・アショートヴナはこの動きを感じとり、この瞬間に彼らの人生が決まろうとしていること、自分がいま正しいことをきちんと言えるかどうかに、すべてが掛かっていることを理解した。(…) 彼女は生まれて初めて、自分に知恵が、人生の知識が、雄弁さが足りないことを痛いほど感じ、助けを求めて祈った」(Бедные, 136)。アルメニアの古い家系の出身であるエンマは、古代から伝えてきた叡知と、危機的状況を乗り越える勇気を備えた賢明な老女である。

家族の中心となるエンマのような女性も、ウリツカヤ作品に特徴的なタイプとして分類できる。『心を込めて、あなたのシューリク』のシューリクの祖母エリザヴェータ・イワーノヴナも、その一人だ。彼女も知性と教養を備え、有能なフランス語教師として働き、繊細な娘ヴェーラを守り、孫シューリクの養育・教育に全面的に責任を持つ。

『メディアとその子供たち』のメディアも、一族の中で「賢明な母」の役を果たしている。彼女には実の子供はいないが、たくさんの甥や姪がいて、家族連れで休暇を過ごしに、ソ連各地からクリミア半島の彼女の家へやってくる。作品の題は、夫への復讐のために我が子を殺したギリシア悲劇のメディアを連想させるが、二人のメディアは両極端と言えるほど異なっている。ウリツカヤのメディアは、兄弟の家族、従兄弟やその子供たちまで含めた、広い意味での家族の中心として、一生を過ごす。

ギリシア人、アルメニア人、ロシア人と民族は異なるが、古い家系、代々の叡知を蓄えてきた家系の出であることが、これらの女性たちの共通点になっている。彼女たちはまた、民族の知恵、一族の知恵を継承しているだけでなく、革命前に高等教育を受け、外国語をマスターした教養人でもある。裕福な商家の出であるエリザヴェータ・イワーノヴナ（『シューリク』）は、革命前にチューリヒとパリで学び、フランス語を教えている。メディアは革命前に女子ギムナジウムを優秀な成績で卒業し、その時の同級生と今もフランス語で文通している。ソ連では秘すべき経歴とされた革命前の知識階級の出身で[39]、ブルジョワ的教育を受けた女たちは、人生経験を重ねて鋭い洞察力までも身につけて、賢明な老女となっている。

『ブハラの娘』のヒロインも、この範疇に入れてよいだろう。ウズベクからモスクワにやってきてブハラというあだ名で呼ばれる美女は、夫に捨てられ、病に侵されながら、ダ

39 『心を込めて、あなたのシューリク』で、レーニン図書館でのシューリクの上司ワレーリヤ・アダーモヴナは、シューリクが家庭教育でフランス語やドイツ語を習得したことについて、「それでよく分かったわ。つまり、あなたは、私もそうだけど、資本主義の残滓なのね」と言う（Шурик, 186）。外国語の修得は、出身階層を示す指標となっている。ウリツカヤはしばしば、革命前までさかのぼって家系や教育を説明して、登場人物の背景を構成する。

ウン症の娘ミーラのために生き、娘の将来設計をすませてから、死を迎えるために郷里へ帰っていく。古い学者の家系、医療の心得があることなど、ブハラにはエンマやメディアなど賢い老女たちとの共通点が多い。ただし彼女は、娘のために全能力を使ってから若くして死ぬので、老女となることはない。不治の病にかかったことを察知したブハラは、故郷へ帰って古老から薬草を手に入れてくる。「私は今は死ねないの、ミーロチカを置いてくなんて…。この草であと6年生きて、それから死ぬわ」（Бедные, 60）と聖なる母は言い、その通りに生きる。ミーラを養護学校に入れて基本的な生活技術を身につけさせ、卒業後は作業所へ通わせ、最後に類似の障害を持つ結婚相手まで見つけてやる。結婚式のひと月後に故郷へ旅だったブハラは、到着後5日目に死ぬ。薬草を用いて必要なだけ延命するという謎めいた東洋的叡知まで加わって、ブハラの神秘性、神聖さは非常に大きい。

ところで、ブハラは、豊かな黒髪を輝かせた「見たこともない東洋の美女」であったのに、母としての純粋な愛に生きている間に、美しさを失う。「その間にブハラは、急激に徹底的に美女ではなくなってしまった。ひどく痩せて顔色が黒ずみ、色とりどりのワンピースはドイツ製の古いトランクにしまって、地味なものを着た。頬とあごには感じの悪い黒い産毛が生えて、輝く歯はすてきな色を失った」（Бедные, 60）とある。病気のせいではあるが、母としての愛に生きる時、ブハラは美女であることをやめるのだ。母としての幸福を味わうベルタ（『幸福な人々』）も、ソーネチカも、目立つほどの口ひげを生やした醜い女として描かれていたことを思い出したい。

ヘレナ・ゴスチロによれば、ロマン主義的な美学は、女性の美徳がそれにふさわしい外形をとることを要求した。トゥルゲーネフは、無垢な少女たちと、経験豊かで性的に積極的な女たちを対比的に描き、トルストイは、信頼に満ちた目をした少女っぽいキティと、豊満な体ではずむように歩くアンナ・カレーニナを対比的に書いたとゴスチロは述べている[40]。美しいものは内側も外側も美しく、つまり美徳を持つ女性を外見も美しい存在として描くのは、女性の身体描写における節約術、ミニマリズムである。至高の愛を生きる女たちに黒々とした口ひげを与えるウリツカヤは、明らかにこのミニマリズムに反抗し、女性の身体を自律的なものとして描いている。その傾向は、時にはあざといほどに強く現れる。

短編『その年の3月2日』で、女教師アントニナ・ヴラジーミロヴナが、教室内での無視に苦しむユダヤ人少女を助ける指導をする場面がある。医師団陰謀事件をきっかけにユダヤ人攻撃が渦巻く情勢の中で、この教師は「わが国ではすべての民族が平等です」と、子供たちに教える。「しかし、リーリャはその時は、この行為の偉大さを理解できなかった」と述べられるほど勇気ある行動をした女教師の外貌は、以下のように説明されている。「アントニナ・ヴラジーミロヴナは、彼女の顔の中でもっとも霊感に満ちた部分であるスチールの歯を光らせた。スチールの歯列は、襟元に飾られた、8の字型のパンみたいにとぐろを巻いたウンコの形をした銀のブローチと、金属どうしの対話をしていた」（Бедные, 170）。ウリツカヤは、気高い心性の持ち主の容貌や身なりを、このようにことさらに貶めて書いている。健全な身体と健全な肉体の共存を尊ぶソ連的価値観に対する作家の抵抗感

40　Goscilo, *Dehexing Sex,* p. 88.

は、大変強いと推測できる。自我を消滅させ、無条件に人を愛することのできるベルタ、ソーネチカ、ブハラなどの女性たちに与えられた口ひげは、大きな意味を持ったディテールである。

5．最近の作品
――長編『心を込めて、あなたのシューリク』、短編連作「貫く線」――

ウリツカヤは2004年に長編小説『心を込めて、あなたのシューリク』を発表した。アレクサンドル・コルンという若者の30歳までの人生が、青年期に重点を置いて語られている。シューリクと呼ばれるこの青年は、生まれたときから父親がおらず、しっかり者の祖母とロマンチストの母に育てられる。父親不在、家庭の年代記、「賢明な母」としての祖母の像など、ウリツカヤの創作の諸特徴はこの最近作にも保たれている。

時代と直接に結びついたディテールの豊かさという特徴も、顕著に現れている。1954年頃の生まれと推定されるシューリクは、1970年代から80年代前半、停滞の時代と言われるブレジネフ時代後期に20代を過ごす。1980年のモスクワオリンピックがわずかにシューリクの仕事に関係する以外には、国家的事件や政治状況は作品では一切触れられない。語学にすぐれた才能を持つ青年は、まともな就職をせず実務的な翻訳をしながら、不満を持つでもなく、その日その日を生きて行く。国家や社会全般について考えないシューリクの生活を描いた作品は、日常的なディテールで満たされる。コルン家をはじめとする登場人物たちの様々な住居の間取りやインテリアが描写され、大学、通り、店の名が具体的に挙げられ、食べ物や衣服も詳しく説明されて、70年代のモスクワの日常が再現される。

ウリツカヤの作品は、イデオロギー不在であること、登場人物にコレクティヴな思考が欠如していることによって、間違いなくアンチ・ソヴィエト的雰囲気をたたえている。しかし、彼女の創作の特色であるすぐれた世態風俗描写が、時にはソ連時代をノスタルジックに描き出す効果を生んでいることも確かだ。特に、多くの作品の舞台となるモスクワの描写について、それが感じられる。『シューリク』について岩本和久は、「この小説はモスクワに暮らした者たちを、いや、70年代のセンチメンタルなソ連映画を見たといった経験でも良い、モスクワに触れたことのある者たちを、過去の想起という甘美な体験の共有へと誘っている」と述べている[41]。シューリクは17歳の頃、家族でイスラエルへ出国する直前の女友だちリーリャと一緒に、夜ごとモスクワを歩き回ったことがある。12年後にリーリャが東京へ向かう飛行機のトランジットで立ち寄ったときも、二人は夜を徹してモスクワを歩き回る。長編『クコツキーの症例』にも、ソヴィエト的社会意識から逸脱してドロップアウトしていく大学生ターニャ・クコツカヤが、夜ごと家を抜け出して彷徨し、昼の街では出会えない人々を知り、モスクワの別の顔となじんでいく部分がある。憑かれたように何時間も歩き続ける行為によって、若者たちが身体を通じて発見するモスクワは、首都の公的な顔から解放された新鮮な魅力を持つ。

41　岩本和久「掘り起こしから回顧へ：最近のウリツカヤの創作をめぐって」『現代文芸研究のフロンティア（VII）』（「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 No.9）北海道大学スラブ研究センター、2005年、190頁。

岩本は、『シューリク』などの作品でソ連時代がノスタルジックに想起されていることに「甘美な自己愛」を見て取り、それを最近のウリツカヤの創作の特徴とみなしている。確かに、ウリツカヤが過去へ向ける眼差しにはノスタルジックな要素があり、それが豊かな細部描写に補強されている面がある。だが、『シューリク』においても他の作品においても、それが最近のウリツカヤの特徴と言えるほどドミナントな要素であるかという点については、留保が必要だろう。岩本も、「賢明なウリツカヤの創作においては、自己愛的な空間に対する批判的な精神が存在していることも、また否定することはできない」[42]と述べ、フランス人ジョエルや出国後12年になるリーリャが有している「他者の眼差し」が、作品に批判的精神を導入していると見ている。岩本の指摘する外国人や亡命者の視点の導入の他に、題材そのものとその叙述のしかたにも、作者の批判的精神、アイロニーが現れていると考えられる。

『心を込めて、あなたのシューリク』は、喜劇的に仕立てられた長編である。育ちのよい都会的なインテリ青年シューリクは、女性への好感度が非常に高く、女たちに迫られる形で大勢の女と関係を持つ。年上の女マチルダのもとに通い、大学の同級生であるカザフ人アーリャに迫られ、母親の上司ファイナに半ば強姦される。キューバ人と恋をして赤ん坊を生んだ同級生レーナと偽装結婚するが、彼女とも関係する。ウリツカヤは病人や障害者をよく取り上げることを前に指摘したが、シューリクの相手にも、ポリオの後遺症で足が不自由なワレーリヤ、精神を病み自殺未遂を繰り返すスヴェトラーナ、アルコール依存症のソーニャ、小人症のジャンナが含まれ、友人の妹である知的障害者との関係も暗示される（酔ったシューリクには記憶がない）。ヴラジーミル・エリストラトフは『ズナーミャ』誌の書評で、「シューリク、これは一種のソヴィエト性生活百科事典である」と述べているが[43]、シューリクの性関係の叙述は、ソ連時代の現実の写実的描写の域を超えて、滑稽やグロテスクの範囲にまで拡がっていると思われる。

自己の欲望の充足に執心する人物が、ウリツカヤ作品には多数登場するが、シューリクを囲む女たちは、ほぼ全員がこのタイプである。欲望の対象であるシューリクと性的関係を持つために、さらに彼との関係を自分の人生と結びつけるために、彼女たちは邁進する。カザフ人アーリャはシューリクと結婚してモスクワの居住権を得ようと願い、父親不在で子供を持とうと決意したワレーリヤはシューリクを相手に選び、長く精神科の治療を受けているスヴェトラーナにいたっては、「私の健康も命そのものも、シューリク次第だってこと、彼は知ってるのに！」（Шурик, 422）と、完全に自己中心的に怨みをつのらせる。一方、母と祖母を悲しませることを罪悪と感じて育った、実にしつけの良いシューリクは、何ごとであれ断るということができない。女たちの要求の自分勝手さが増大し、障害や病気の程度が強まるほど、拒否することのできないシューリクとの関係の描写は、滑稽さを増す。『モスクワ・ニュース』紙の書評でミハイル・ゾロトノーソフは、「19世紀に根を持つセンチメンタリズム、初期には彼女自身のものであったセンチメンタリズムを、ウリツカヤは故意に嘲笑し、彼女自身が読者の心に生み出してきた感情を、長編の中で一貫して排斥している。この感情面での動力学の中に、登場人物や読者に対する彼女の態度の新し

42　岩本「掘り起こしから回顧へ」185頁。
43　*Елистратов В.* Про Шурика, который «делал это» // Знамя. 2004. № 8. С. 213.

さがある」と述べている[44]。シューリクの青年時代を性関係を中心に描いた主題そのものと、その叙述のしかたには、語り手と登場人物との絶妙な距離感の中に生まれていたリリシズムが減退して、アイロニーが前面化しているのがうかがえる。ゾロトノーソフの書評は、そうしたウリツカヤの変化を指摘している。

語り手と登場人物の関係の変化は、最近の短編連作「貫く線」にも見て取れる。「貫く線」は女たちの嘘をテーマにした作品群である[45]。ジェーニャという中年女性が見聞きした話として、さしたる理由もないのに嘘をつく女たちが書かれている。保養地でジェーニャと同じ家に部屋を借りたアイリーンは、子供を次々に亡くしたことをジェーニャに打ち明ける。最初の子はお産で臍の緒がまきついて死んだ。天使のような娘のディアナは、ひどいインフルエンザに罹っていたアイリーンがまちがった薬を飲ませたために死んだ。その後、運命的な出会いで再婚した夫との間に男の双子が生まれたが、交通事故で夫も双子も死んだ……。あまりに悲しいアイリーンの話はすべて嘘であることが、最後に明かされる（『ディアナ』）。存在しない兄のことを語り続ける少女（『ユーロチカ兄さん』）。「海軍の将校だったパパが事故で死に、ママの再婚相手に虐待・レイプされて家を出て…、もうすぐスイス人の銀行家と結婚する」と全員が同じ作り話をする、スイスで働くロシア人売春婦たち（『幸運なケース』）。いずれの場合にも嘘をつく者たちの心理は描写されず、作品に動機づけが欠けている。

テーマを同じくする作品を比較すると、ウリツカヤ作品の時間的変化が明らかになるだろう。大きな年齢差のある男女（少女と、大人の男もしくは老人）の関係を、ウリツカヤは繰り返し書いている。その関係は、『ブローニカ』（1989 年）では 10 代の少女の命がけの恋として書かれていた。『ソーネチカ』（1992 年）におけるロベルトとヤーシャの関係は名付けようのないものだが、老いたロベルトが 20 年ぶりに絵筆を持つきっかけになった関係として書かれていた。ポーランド人の美少女ヤーシャの白い顔に触発されてロベルトが描いた白のシリーズ 52 枚は、死後ではあるが彼に世界的な名声を与える。これらと比べて、「貫く線」に含まれた『話はおしまい』は、明らかに異質である。13 歳の少女リャーリャは、遠い親戚である中年のイラストレーターと恋愛関係にあると、ジェーニャに打ち明ける。リャーリャが何度も訪ねてきて詳細に語り、ジェーニャを震え上がらせた話は、最初から最後まで嘘だったことがわかる。他の短編と同様に、この作品でも嘘の動機は語られていない。嘘がばれたと知った瞬間にリャーリャは立ち去るだけである。数年後にジェーニャは親戚が集まる席で、結婚して娘を連れたリャーリャに会う。「4 歳の女の子はジェーニャのところへ来て、わたし王女様なのと言った…。それだけ。話はおしまい」[46]と、作品は結ばれる。

---

44 *Золотоносов М.* Мужчина ее мечты // Московские новости. 13 февр. 2004 (№ 3).

45 連作「貫く線」は 2003 年発行の短編集（*Улицкая Л.* Сквозная линия: Повесть, рассказы. М., 2003）では嘘にまつわる 5 作で成り立っていたが、翌 2004 年に別の短編集（*Улицкая Л.* Искусство жить. М., 2004）に入れる際に 6 作目が加えられた。付け加えられた『生きる技』は、前の 5 作で嘘の聞き手・暴き手であったジェーニャが交通事故で重度の障害を負い、夫や友人たちの力で生きる気力を取り戻す話である。嘘と関係のないこの作品は、従来のウリツカヤ作品により近いものだが、連作の構成を崩しているようにも感じられる。

46 *Улицкая.* Искусство жить. С. 358.

見事に語られた話がすべて嘘であるという仕組みは、作品内の現実を不確かなものにする。動機づけのない無目的で無意味な嘘は、作家の語りの技術の上に成り立つ作品の遊戯性、虚構性を強調し、作品内の現実世界を相対化する。

『シューリク』や「貫く線」に認められる作家と作品世界の新しい関係が、これからどのように発展していくのか、ウリツカヤの創作でどんな位置を占めるようになるのかについては、これからの作品を追っていかなければならない。

まとめ

本論では、ウリツカヤの 15 年あまりの創作をふりかえり、その特徴を探った。初期の短編群にすでに明らかに現れているように、身体・生理描写が具体的で生々しいこと、世態風俗描写が豊富であることが、ウリツカヤの作品の特徴になっている。そのような特徴を持つ文章で、ソ連時代の市井の人々の暮らしが、家族を中心に描かれてきた。他の現代ロシアの女性作家と同じく、ウリツカヤの作品もほとんどが父親不在で、その代わりに多くの母親が登場する。本論では「聖なる愚者としての母」と「賢明な母」の二つを、ウリツカヤ作品の特徴的な母親像として論じた。

作家は初期短編群の後、90 年代後半に、ある家族の歴史を中心にソ連社会を複合的に捉えた長編小説『メディアとその子供たち』『クコツキーの症例』を発表し、作品世界を飛躍的に拡げた。最新の長編『心を込めて、あなたのシューリク』は、それらとは対照的に、主人公シューリクと多くの女性たちとの関わりを中心に、徹底して個人的な世界を構築しており、創作の姿勢にある程度の変化がうかがえる。だが、老人、病人、女性、子供や社会的にマージナルな存在を中心に据えて、すぐれた身体的描写や世態風俗描写にもとづいて、個人や家族の歴史を語るというウリツカヤの作品世界の特徴は、初期から今日まで保たれている。

沼野充義は、ボリス・アクーニンの推理小説の人気について、「読者は、面白い、しかし俗悪でない『よい読み物』を求めていたのだ。そして、ロシア・ソヴィエト文学の伝統の中では、まさにこの『よい読み物』が欠けていたのである」と述べている[47]。登場人物が個性的で、豊かな物語性を持つウリツカヤの作品も、まさにこのような「よい読み物」を求めるロシアの読者の要求に応えてきたのだと思う。アクーニンの探偵ファンドーリン・シリーズが、現代ロシアで熱心に再発見を試みている帝政時代末期に読者を導くのに対して、ウリツカヤの作品は常に作家自身が体験してきたソ連時代後半を描く。しかも、ほぼ同じ時代を扱ったワシーリー・アクショーノフの大河小説『モスクワ・サーガ』で、主人公の一族が医師、軍人、党員としてソ連の政治・歴史に直接的に関係し、大物の政治家たちと接触するのと対照的に、ウリツカヤの作品は徹底してマージナルな人物の視点から描かれている。「大きな物語」が終焉したポストソヴィエト時代を代表する彼女の創作は、「大きな物語」の時代のごく小さな物語を積み重ねてきた。社会の周縁に位置するユニークな人物たちによるストーリー性の豊かな作品は、アンチ・ソヴィエト的雰囲気とノスタルジー

47　沼野充義「『間』の文学？：現代ロシア小説の新しい潮流について」『窓』第 116 号、2001 年、6 頁。

をどちらも感じさせつつ、これからも読まれて行くだろう。

付

1）リュドミラ・ウリツカヤ作品集一覧

Сто пуговиц: Рассказы. М., 1983.
Бедные родственники: Повесть, рассказы. М.: Слово, 1994.
Медея и ее дети: Повесть. М.: Вагриус, 1996.
Веселые похороны: Повесть и рассказы. М.: Вагриус, 1998.
Лялин дом: Повесть, рассказы. М.: Вагриус, 1999.
Казус Кукоцкого: Роман. М.: ЭКСМО, 2000.
Медея и ее дети: Повесть. М.: Вагриус, 2001.
Пиковая дама и другие: Рассказы. М.: Вагриус, 2001.
Сонечка, Веселые похороны. М.: ЭКСМО, 2001.
Бедные, злые, любимые: Повести, рассказы. М.: ЭКСМО, 2002.
Второе лицо. М.: ЭКСМО, 2002.
Девочки: Рассказы. М.: ЭКСМО, 2002.
Цю-юрихъ: Роман, рассказы. М.: ЭКСМО, 2002.
Веселые похороны. М.: ЭКСМО, 2003.
Сквозная линия: Повесть, рассказы. М.: ЭКСМО, 2003.
Детство сорок девять: Рассказы. М.: ЭКСМО, 2004.
Искренне Ваш Шурик: Роман. М.: ЭКСМО, 2004.
Искусство жить: Рассказы. М.: ЭКСМО, 2004.
История про кота Игнасия, трубочиста Федю и одинокую Мышь. М.: ЭКСМО, 2004.
История о старике Кулебякине, плаксивой кобыле Миле и жеребенке Равкине. М.: ЭКСМО, 2004.
Люди нашего царя. М.: ЭКСМО, 2005.

2）リュドミラ・ウリツカヤ作品の雑誌掲載

＊作品の初出については、まだ十分に調べがついておらず、不完全なリストである。

Бронька // Огонек. 1989. № 52.
За капустой // Крестьянка. 1989. № 2.
Бумажная победа, Счастливый случай // Крестьянка. 1990. № 3.
Дочь Бухары // Русская мысль. 1990; Огонек. 1991. № 2.
Генеле-Сумочница // Новое русское слово. 20 апр. 1990.
Народ избранный // Континент 65. 1990.
Второго марта того же года // Русская мысль. 26 июля; 9 авг. 1991.
Сонечка // Новый мир. 1992. № 7.
Дочь Бухары // Новый мир. 1993. № 1.
Девочки (Рассказы: Чужие дети, Подкидыш) // Новый мир. 1994. № 2.

Гуля // Октябрь. 1994. № 2.
Медея и ее дети: Семейная хроника // Новый мир. 1996. № 3-4.
Зверь // Новый мир. 1998. № 4.
Веселые похороны (Роман) // Новый мир. 1998. № 7.
Путешествие в седьмую сторону света // Новый мир. 2000. № 8-9.（単行本の題：Казус Кукоцкого）
Цю-юрихь (Рассказ) // Новый мир. 2002. № 3.
Искренне Ваш Шурик (Роман) // Новый мир. 2004. № 1-2.
Они жили долго..., И умерли в один день (Два рассказа) // Новый мир. 2005. № 3.

Творческий мир Людмилы Улицкой

Мотидзуки Цунэко

В результате политических и общественных потрясений, произошедших в современной России за последние 20 лет, культурная ситуация в стране заметно изменилась. Одним из самых ярких явлений в области литературы стала активная деятельность женщин-писателей. Огромный интерес вызывают у читателей ставшие необыкновенно популярными такие непохожие друг на друга писательницы, как Татьяна Толстая, Людмила Петрушевская, Виктория Токарева, а также авторы детективной литературы Александра Маринина, Дарья Донцова и др., произведения которых активно издаются. Таким образом, одной из самых характерных особенностей современной русской литературы можно считать расцвет женской прозы.

Литературная деятельность Людмилы Улицкой (род. в 1943 г.) началась сравнительно поздно. Ее первый рассказ появился в журнале «Огонек» в 1989 г., а первый сборник рассказов вышел в 1994 г., то есть ее профессиональная творческая жизнь составляет всего 15 лет, за которые писательница успела сделать очень много: на август 2005 г. ею было опубликовано 5 крупных произведений (3 романа и 2 повести) и 36 рассказов. В 2001 г. Улицкой была присуждена самая престижная литературная премия в современной России—Букер-Smirnoff, а в 2004 г. она была названа лучшей писательницей года. Вне всякого сомнения, Улицкая является одним из крупных представителей русской литературы постсоветского времени. В настоящей статье мы проанализировали все произведения Улицкой и постарались выяснить специфические особенности ее творчества.

В своих произведениях Улицкая всегда описывает личную жизнь людей и семью советской эпохи; политика и события государственной важности остаются вне поля ее зрения. Ее герои, как правило, «маленькие люди»—старики, больные, бедные, отверженные обществом, —словом, те, кого сейчас принято называть маргиналами. Однако при этом важно отметить, что этих самых маргиналов Улицкой никак не назовешь ни униженными, ни безгласными. Они не боятся что-либо потерять, поскольку не имеют ни имущества, ни высокого общественного положения, и поэтому живут свободно, подчиняясь только своим собственным представлениям. Семейная жизнь или хроника семейной жизни героев советской эпохи, которым чужд весь советский социум,—типичная тема произведений Улицкой.

Отметим следующие характерные черты стиля писательницы:

1) Наличие физиологических описаний человеческого тела и ощущений героев. Улицкая прямо и подробно описывает женское тело и все проявления физиологии: болезни, секс, физиологические отправления, плач и т.д. Такие описания можно найти не только у Улицкой, но и у многих современных писателей, особенно постмодернистского направления. Однако, в отличие от постмодернистов, Улицкая не доходит до гротеска и всегда избегает просторечий и вульгаризмов, которые являются ведущими элементами стратегии постмодернистов.

2) Мастерство бытописания. Как уже было сказано выше, главные темы Улицкой—частная жизнь героев и семейные истории. Для усиления реалистического впечатления писателю нужно наполнить мир произведения бытовыми деталями. Критики часто называют Улицкую мастером бытописания, и действительно, у нее всегда подробно описываются жилище, одежда, еда, учебные заведения, рабочие места героев, —все то, что позволяет читателю

безошибочно определить время действия. Кроме того, она всегда называет конкретные улицы, переулки, площади, станции и остановки в Москве, которая большей частью и является сценой ее произведений. Благодаря такому мастерскому бытописанию, изобилующему деталями, творчество Улицкой вызывает ностальгию по советскому времени, несмотря на то, что в ее произведениях явно ощущается антисоветский настрой и у персонажей, и у самого автора.

В связи с этим стоит отметить, что в советской литературе мастерство бытописания не всегда ценилось высоко, а, напротив, считалось признаком отсутствия определенной идеологии. Женщин-бытописателей, охотно изображавших частную и семейную жизнь, называли бытописателями с некоторым пренебрежительным оттенком даже в конце 70-х гг. Возможно, Улицкая продолжает писать только личные и семейные истории, полные бытовых подробностей, имея в виду именно эту традиционную точку зрения. Ведь в советской культуре, в том числе и в литературе, всегда придавалось наибольшее значение именно идеологии и общественной жизни человека, а к частной жизни личности отношение было пренебрежительное. Поэтому произведения Улицкой можно считать своеобразным протестом против этой традиционной идеологии.

Далее мы обращаемся к анализу образов героев. В произведениях Улицкой, так же, как и у других женщин-писателей, большое внимание уделяется проблеме безотцовщины. У Улицкой почти не встретишь героя-отца, зато всегда много матерей. И, если семья состоит из нескольких поколений, то среди старших также не встретишь мужчины, —в ней, как правило, бабушка, мать и дети (среди которых, конечно, есть сыновья и внуки). В своей статье мы подробно останавливаемся на образе матери у Улицкой. Среди всего многообразия героинь можно выделить 2 типа, которые особенно заметны:

1) Мать—святая дура, из-за психической травмы или горя лишившаяся рассудка. Она проявляет сверхъестественную проницательность по отношению к любимым людям.

2) Мудрая мать, защищающая свою семью всеми силами, своим умом и мужеством. У таких женщин, как правило, сочетаются происхождение из традиционной семьи и дореволюционное высшее образование.

В творчестве Улицкой нам открываются глубокие народные и семейные традиции, не заслуживавшие внимания, однако стойко сохранившиеся в советское время. Творчество Улицкой в некотором смысле представляет постсоветскую эпоху. Ее произведения, в которых свободной и независимой жизнью живут маргиналы, отверженные обществом, но сохранившие активную позицию и человеческую уникальность, и в дальнейшем будут волновать читателей.